小田原史談

第 151 号
発行所　小田原史談会
小田原市栄町2-13-20

新装成った城山の跨線橋
衆望によって青橋の名を残す

平成四年十一月、小田原市城山のJR東海道線跨線橋「青橋」が、拡幅新装されて開通した。やがて小峯山を縦貫し早川へ通ずれば、小田原の交通図も大きく変わるであろう。「青橋」と呼ぶ単純素朴な橋名には、古い小田原人にとって忘れ難い郷愁が篭められているのである。

大正九年(一九二〇)十月、今まで国府津から山北・沼津を通っていた東海道線が、熱海線として、小田原まで延長した時、小田原の人々は欣喜雀躍してこれを祝った。明治以来西相の片隅に燻(くすぶ)りつづけていた小田原がいよいよ東京へ直結したからである。町内は提燈行列やら花車(だし)屋台まで繰り出して久し振りに華やいだのである。

小田原まで延長した熱海線は引き続いて工事が続けられ、小田原駅開業以前にすでに真鶴までレールは敷かれていた。今の小田原高校から小田原城趾へと続く小峯山の尾根を崩して切通しをつくり、その奥の小峯山トンネルも完通していた。そして弁財天通りから入谷津に通ずる道に跨線橋も架けられた。この橋桁が緑色に塗られていたので、誰れ言うともなくこの橋を「青橋」と呼んだのである。従ってこの名は正式のものではない。このたび新装成ったこの橋の正式の名を募集したところ、今まで通りの青橋の応募が圧倒的に多かったので「青橋」を正式の橋名にしたのだと言う。

実はこの城山切通しの工事中(大正七年三月)土中から縦二一二cm横五七cmの自然石の碑が発掘されたことは余り知られていない。碑の表面には阿弥陀三尊が彫られ、その下に次の文字が読まれた。

為悲母一周忌
乃至法界衆也
建武元、七、八
敬白

建武の年号(一三三四)があるから南北朝時代の貴重な碑である。この碑はその後東京上野の国立博物館に移され、現在は博物館に並ぶ表慶館の庭上に建っていると言う。従って小峯山の尾根は古くから人に知られていたことが判る。

開通当時少年期にあった私は、小田原では珍しい跨線橋青橋上に毎日のように遊びにゆき、橋下を往き来する蒸気機関車の姿を飽くことなく眺めたことを思い起こすと共に、竣工成った新しい「青橋」の姿を心から祝福するのである。

(高田喜久三)

〈青橋のプロフィール〉

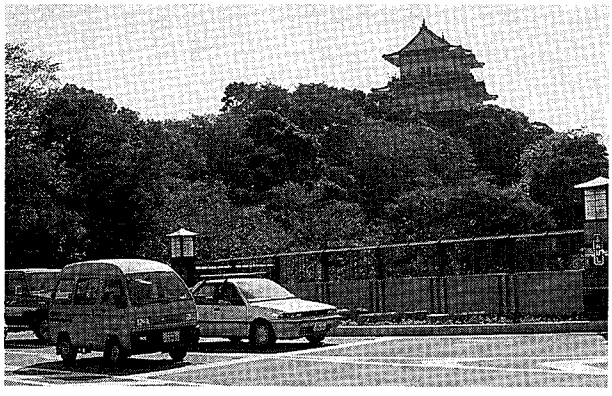
この橋は、小田原の中心市街地を東西に結ぶ跨線橋として1925年に造られ、このたび都市計画道路の整備に併せて架替えました。

橋の形、色彩及び親柱、照明灯などについては、小田原市の地区景観ガイドプランに基づき小田原市のシンボルである小田原城と調和した景観が形成されるようにデザインしました。

特に橋の表情を豊かにするため、橋の中央部には自然石を並べ、お城の石積みの重なりを表現しました。三つの景石は、本丸、二の丸、三の丸を象徴しています。また、歩道路面の模様は、小田原城の遺構である障子堀(敵の侵入を防ぐため、堀底を障子の桟の形にした特殊な構造の堀)をヒントの黒い四角で表わしました。

この青橋も小田原城と同様に大切にされ、末長く親しまれることを期待しています。

1992年 10.月　神奈川県



小田原叢談(十一)

石井富之助

小田原の初もうで

新年になって神社佛閣にお参りすることを初もうでという。また恵方参りというのは、歳徳神が来訪されるめでたい道筋を恵方といって、その方角にあたる神社にお参りすることをいうのである。近ごろでは初もうでも恵方参りもごっちゃになってしまって、方角など一向かまわずに、どこへ行っても恵方参りというし、それをひっくるめて初もうでといっているようである。

元来、初もうでといえば氏神様へお参りするのが普通のことであるが、わたしの子供のころには、御幸の浜へ初日の出をおがみに行き、その帰りに松原神社、報徳二宮神社にお参りをし、雑煮を祝ってから、氏神の大稲荷神社へ行くのが、家の毎年のしきたりであった。

元日のお参りは一應これですむのだが、藩士の家の人々はおそらく大久保神社へのお参りを第一にしたことであろう。

初寅の日に毘沙門天にお参りするという風習は初寅もうでといって全国的なもので、京都では鞍馬寺、奈良では信貴山、東京では芝の正伝寺、牛込の善国寺、品川の連長寺などの毘沙門が江戸時代から有名であるが、小田原では水の尾の毘沙門さんにお参りする。

夜中にお参りするのでわたしは一度も行ったことはなかったが、店の者はドテラなどを着こんで出かけたものであった。小田高の裏の道を行ったのか、荻窪から行ったのか、どっちにしても暗い夜道を行くのだからたいへんであったことであろう。

つぎは二十三日の板橋のお地蔵さんである。このことは別稿に書くが、特別の事情が無い限り奥の者も店の者も交代で出かけた。奥の方はいなかからこれにかこつけて年始に来る者があるし、店の方はこれもついでに買物をして行こうという人が来るので昼間はなかなか忙しかった。

そのつぎは、二十七日、二十八日の道了さんである。

大雄山最乗寺はさすがに関東の名さっだけあって、京浜その他から講中の人たちが初もうでに押しかけてくる。もちろん小田原からも毎年かかさずお参りするという人が非常に多く、たいへんにぎわったものである。

二月に入ると初午である。初午には秦野の白笹稲荷に出かける。

白笹稲荷は秦野市今泉にあるが、むかしから小田原に信仰者が多く、わたしの父なども世話人をやっていた。

小田原の初もうではこれで一応終わるのである。父は毎年これだけのお参りをしていた。今から考えるとご苦労なことだったと思うのだが、それだけにまたお参りしたあとの気分は一段とよかったにちがいない。

近ごろ初もうでといえば、明治神宮、鎌倉八幡宮、川崎の大師、成田山などに出かける人が多いが、はてこの人たち、氏神様へのお参りはもちろんすましたのだろうなあと、余計なことを考えるのである。

カット　内田美枝子

板橋のお地蔵さん

毎年正月と八月の二十三日、四日の両日は板橋のお地蔵さんの縁日で、この日には特別に駅前から地蔵尊行きのバスが出るほどお参りする人でにぎわう。

『新編相模国風土記稿』にはこのことについて、

宗福院、金龍山と号する。香林寺末、本尊弥陀。慶長三年（一五九八）地蔵堂のところに創建した。開山は理吟文察（本寺九世。慶長七年七月二日卒）

地蔵堂　木の座像を安置している。身のたけ一丈（約三メートル）弘法大師の作と伝えている。昔は湯本の字内古堂にあった。永禄十二年（一五六九）ここに移したという。毎年正月、七月二十三、四の両日を縁日とし、おおぜいの僧りょ、俗人が参拝した。この日に堂の前で市が開かれ、時物を交易した。

とある。『風土記』には七月とあるのに今は八月となっている。これは七月では農家がまだ忙しいので一か月遅らせたという説もあるが、あるいは明治になっ

て旧暦から新暦に切りかわった時に今のようになったのかも知れない。起源についても元禄時代からなどと伝えられているが、はっきりした証拠はないようである。

今でも相当にぎやかであるが、わたしの子供のころには、一軒の家でだれかがお参りに行く。だれも行かない家はなかったといってよかった。それにこの半年の間に亡くなった人のある家では、必ずお参りすることにもなっていた。

昼間は近郊近在のいなかから来る人が多く、町の人たちはたいがい夜お参りに行った。わたしなどは夕飯を食べてから父につれて行ってもらったが、店の者は十時ごろ店をしめてから出かけた。そのころの商店は年中無休で、物日以外には遊びに出ることもなかったから、お参りはかこつけで、いい気晴らしになっていたようである。

片岡永左衛門さんは『明治維新以前の小田原の年中行事』の中にこう書いている。

二十三日は板橋の地蔵尊の縁日で、近郷よりの参けい人は朝からぞろぞろやってきて、そのついでに買物をする者も多く、一日の売上げが千両というほどの人出であった。夜は宿内の人が多く、見世物小屋もでき、のぞき眼鏡、からくり、露天商人も諸方から入りこみ、昼夜とも人の往来が絶え間もなかった。

わたしがよくお参りに行った大正のはじめごろも、まったくこれと同じであった。板橋見付の光円寺の角をまがると、道の両側に露天商人が並んでいて、道は人でいっぱい。そこへ電車が入ってくるので、いやたいへんな混雑であった。電車は道のほぼ中央をゆっくりゆっくり走る。交通整理がいきとどいていたのか、人も電車ものんびりしていたのか、交通事故など聞いたこともなかった。地蔵尊行の電車はたしか上板橋で折り返し運転をしていた。お地蔵さんの境内に入ると身動きができないほどで、ようやくお参りをすませると、見世物小屋や露天を一まわりするのだが、それも人に押され押されして容易なことではなかった。

帰りに板橋の知り合いの家へ寄るのがまた楽しみだった。板橋の家ではどこでもごちそうを用意して待っている。酒はある、赤飯、すし、そば、ようかん、きんとん、煮しめ、なんでもある。夕飯を食べて行くのだからそんなに食べられるはずはないが、ともかく食べ物がたくさんあって、おおぜいの人が集まるということはにぎやかで、楽しい。

今でもそうかも知れないが、そのころいなかの人たちは、お年始とお地蔵さんを兼ねて出かけてくる。だから山角町から板橋へかけては、どの家でもお正月とお地蔵さんと、ごちそうを二度作ることになる。どっちかというと、お正月の方よりお地蔵さんの方に重きをおいているようであった。

（続）

板橋地蔵尊の縁日風景　平成四年八月撮影

資料紹介

小足庶発第一号
昭和十六年一月六日
足柄出張所長　山田保治
各区長殿

砂糖及米穀特別配給其他ニ関スル件

標記ノ件ニ関シテハ本年一月ヨリ当分左記ノ通リ決定致候申請書証明ニ付テハ充分御承知ノ上御取計相成度此段及通牒候也

追而左記第六項ニ付テハ出張所長ノ内諾ノ上申請相成度尚昨年拾壱月ヨリ拾貳月ニ渡リ割当配給致候手袋購入票ハ来ル八日迄御使用相成度候有効期日ハ拾貳月廿日限リナルモ一月五日迄ノ未使用数五十三枚有之候ニ付該当者ニ至急御周知方相煩度念為申添候

記

◎砂糖特別用配給量及種類
一市　葬　壱貫匁目以内
二婚儀及葬儀　五百　仝
三法　事　参百　仝
四入営及帰還　参百　仝
五病　人　壱百六拾匁目
六其他足柄出張所長ガ配給ノ必要ヲ認メタル事項
◎米穀臨時配給量
五升以内（一人ニ対シ七才ノ割）

（下井細田区有文書）

（付記）この文書は、昭和十五年（一九四〇）十二月二十日、小田原町が足柄町大窪村・早川村と酒匂村の一部を合併後の翌年足柄地区への最初の通達で、戦死者の市葬の折、配給量を優先した事とが分る。才は容積の単位、尺貫法で一勺の十分の一。

近代小田原百年小史稿(八)

高田喜久三

昭和現代史

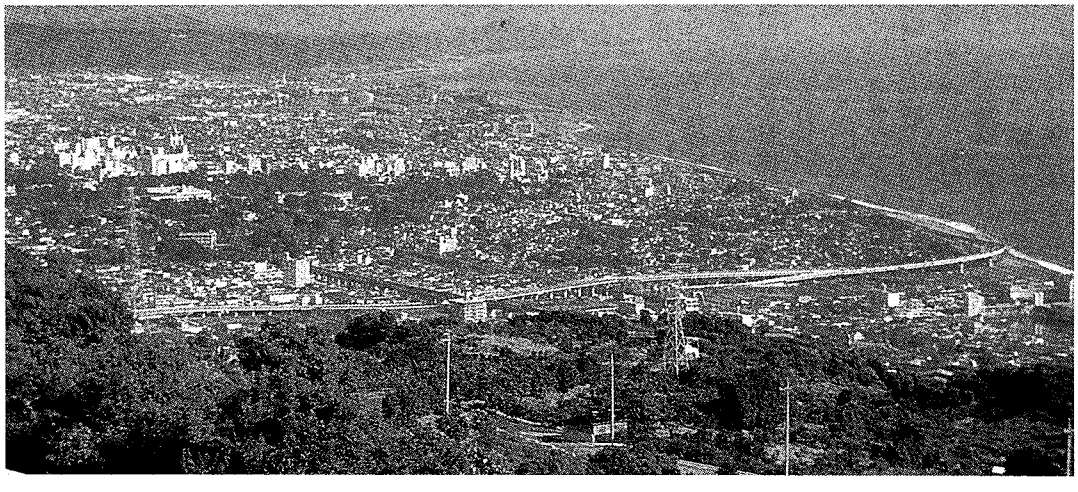
昭和二十年八月十五日以前の日本は、今では完全に歴史時代となってしまった。それはただいま現在とはまるで異次元の社会であったからだ。従って敗戦以後のことは現代史と名付けるのが至当であろう。しかもその境界である昭和二十年八月十五日、我国が無条件降伏して占領軍の管理下に置かれたことを私たちはまるで忘失してしまったかのようである。戦後生まれの人は別としても、占領下を体験した人々も、かつて我々が降伏したことを見事に忘れているようである。

小田原の荒久旧滄浪閣にCIE(占領軍の教育担当部)が駐屯して、当地方の学校教育、社会教育を支配し、教科書を墨でくろぐろと消したことも、占領軍の黒人兵が大股に小田原市街を濶歩したことも、いまの市民会館の処に、カマボコ兵舎を利用した「アメリカ図書館」が存在したことも、さらに一升の米を得るために列に並んだことも、復員服に軍隊の編上靴をひきずり、リュックを背に食料を得るために農村を駆けめぐった卑屈な姿を、まるで悪夢のようにしか考えない現代人。そんなこともこんなことも一朝の夢物語りとなってしまったのは、その後の転変のテンポが余りにも速すぎたからであろうか?

この当時を思い起こすために、当時世上に流行した「言葉」を列挙してみよう。「パンパン」「赤線」「ズルチン(粗末な甘味料)」「遅配(米の配給が五日も十日も遅れること)」「カストリ(酒粕から造った非常に粗悪な酒、なかにはメチールアルコールを交ぜたものもあって、これを飲んだ多くの人が失明した)」そして「ヤミ市」「ヤミ相場」「裏口営業」「斜陽族」「たけの子生活」等々枚挙にいとまがない。これらの言葉も今日ではまるで実感を伴わない過去のものとなってしまった。

このように占領軍の枷(かせ)の中で苦しい惨めな日々を送った私たちも不思議に精神的には非常に明るかった。それは戦前とはちがって思ったことは自由にしゃべれるし、タブーというものが消え去ったからである。かつて福沢諭吉が言ったように「人は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の言葉を文字通り事実として信ずることが出来たからである。かくて「手から口へ」の日常の中から再建日本の新しい芽を育てるべく、私たちは努力し、小田原でも数々の新しい萌芽をみることが出来たのである。

昭和二十二年には小田原市長選挙が行われて、佐藤謙吉が鈴木英雄に替って市長に選出された。それまで市長は公選でなく、市民の知らないところで何時の間にか決定されていたのである。しかも戦後は女性にも選挙権が与えられた。やがて二十五年には鈴木英雄の弟十郎が市長に選出された。彼は政界からではなく、永い間歌舞伎座支配人の職をつづけていたので「文化市長」の名で市民に知られた。彼は早速小田原城趾を整備して「子供博覧会」を開催した。いまだ天守閣も常盤木門もその姿はなかったが、小田原市民はこのときはじめて小田原城の姿を内部からその目で見ることが出来たのである。博覧会そのものはチャチなものであったが、小田原の存在を天下に知らしめた意味で、このイベントは成功であった。そして貧しい小田原市民の生活の中に漸く曙光が射してきたのである。しかもこの年、朝鮮戦争が勃発して日本経済に復興の踏切り台を与えたのである。



一夜城から俯瞰の小田原市

それにしても戦後四、五年間はなんと自然災害が多かったことか。昭和二十一年の南海道地震(和歌山県、

徳島県、高知県）二十三年の福井地震などの外、小田原では再三の台風被害を被っている。二十二年のカサリン台風、二十三年のアイオン台風、二十四年のキティー台風と、いづれも米軍が命名した優しい女性名台風が恐ろしい猛威をふるった。殊に早川はそのたびに氾濫し、左岸の南板橋は石ころの河原と化したのである。海岸も当時は西湘バイパスもなく、キティー台風は堤防を乗り越えて大きな被害をもたらした。

一方、このような混乱と再建の中で、小田原市は次第に近隣町村を合併して市域をひろげて行った。昭和二十三年に下府中村、二十五年に桜井村、二十九年に豊川村、国府津町、上府中村、下曽我村、片浦村、さらに三十一年には曽我村の一部、四十六年に橘町が合併してこんにちの小田原市が形成されたのである。このとき小田原市の人口は十六万三千六百三十四人、四万七千百五十九世帯となった。ちなみに平成四年現在は、人口十九万六千、世帯およそ六万である。

昭和二十六年九月にサンフランシスコ条約が結ばれて、曲りなりにも占領下から独立を得た我国は、昭和三十年になると「戦後は終わった」の声がチラホラ世上に流れはじめた。しかし戦後の猛烈なインフレを漸く克服し、朝鮮戦争を足がかりとして経済復興が始まったこの時期、我国はあらゆる分野でアメリカナイズが進んで行ったことは止むを得ない成りゆきであった。

小田原競輪が始まったのは昭和二十四年八月であるが、これは戦後復興の資金、特に学校建築、道路整備のためと言う名目で、公営ギャンブルが公民権を得たのである。これと前後して小型ギャンブル「パチンコ」が小田原にも登場した。私ははじめパチンコブームはせいぜい四、五年と思っていたところ、予想に反して年を逐うごとに盛況巨大となり、こんにちでは庶民の娯楽として抹殺すべくもない存在となってしまった。競輪にしてもパチンコにしても、戦前の倫理意識ではとうてい許容出来ぬものなのに、戦後は大手を振って横行する。つまり戦前と戦後では人々の価値観がまるで変わってしまったのである。戦後は「物が第一、金が第一」が人々が生きる道の主流となってしまった。そして戦後四十七年経ったいま、それらの咎めが抜き難い汚濁となって随所に噴出をはじめてきたのだ。

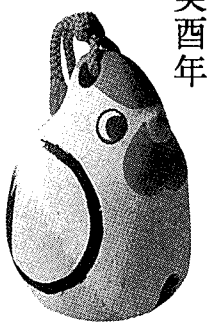
政治の腐敗は言うに及ばず、教育の荒廃、悪質犯罪の多発、利益優先に走った経済の結果である公害の恐怖等々。今や私たちはこれらを克服すべく、再び第二の変革期を迎えようとしているのである。

小田原市では二十一世紀プランなるものを構想し、すでにその前期の事業は市民の目の前に姿を現した。すなわち城跡二の丸中堀の復元、小田原球場の完成、球場に隣接する上府中公園の造成、一夜城跡の公園化等々ここ数年で市内外の面目は一新されつつある。

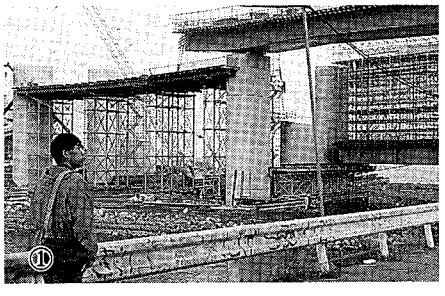
そして残る数年を経て私たちは二十一世紀を迎えることになるのである。（了）

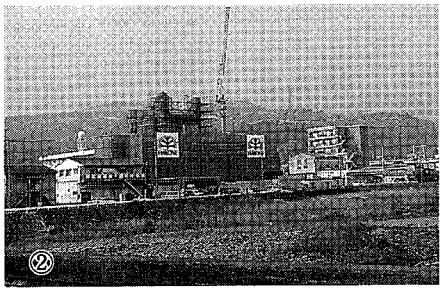
賀正

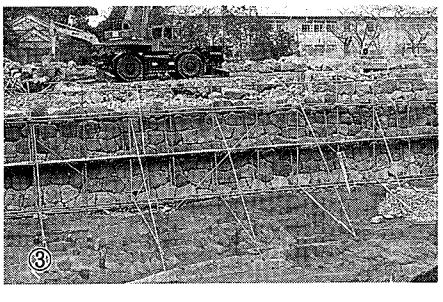
平成五癸酉年



未来への小田原







①西湘バイパス改修工事　早川川尻
②県立水産試験場新築工事　早川右岸川尻
③小田原城址二の丸中堀復元工事

駅弁物語（一）

＝わが故郷山北の＝

三谷喜久満

かつての山北駅

東海道本線が国府津駅から山北・御殿場を通り沼津へ抜けていた。その頃は山北駅は東海道線の主要駅で、下り線の各列車はここで後部に補助機関車を着けるから、急行・特急と言えども停まるのである。何かこの駅は独特の雰囲気を持っていた。

国府津駅を過ぎ足柄平野とその先の箱根山を左に見ながら、やがて山北の谷へ入って来ると俄かに線路の両側に密柑畑の山が迫って来て、野立ての看板が矢鱈に目に入って来る。箱根ごえの山路に掛る風景である。

乗客は誰言うとなしに「ああ、山北か……」と声を発する。これは旅なれた人の声であろうか。東京をでてから可成りの距離に来たと言う意味があり、これから暫く機関車の煤煙に悩まされると言う声に聞こえる。又ここで弁当を買わないと沼津までひもじい思いをするという切ない響きがこもっていた。

この山北駅は乗降客は少ないが、駅そのものは小型ながら鉄道の全機能と設備を持った駅であった。そしてこの静かな山峡の駅のホームには駅弁屋が在り、売子の呼声がしばしの間賑やかに聞こえるのは楽しい一時である。

さて次の項より山北の駅弁屋に纏わる話を書くことにする。

駅弁屋「中川」

この駅弁屋の屋号は「中川」と言って駅前に駅売弁当の製造所を持ち、なかなか繁盛していて働く人は皆活気があった。先に述べたように各列車が止ったので駅弁を買う客が多い。

したがって売子も大勢いて列車が到着する度に売子の声が賑やかであった。その頃「中川」で一日に炊く御飯は白米で一日一俵であると私の姉が何処からか聞いてきて私に話してくれた。

この弁当屋「中川」の姓は瀬戸と言う。瀬戸姓は神奈川県西部には大変多い姓である。或る時私は、父に弁当屋は瀬戸と言うのにどうして「中川」と言うのか聞いた事があった。父の言うには酒匂川の上流に三保村（山北町）の中川と言う所があり、武田信玄の隠し湯と称する湯治場がある。その中川の出身だから中川の屋号を付けたのだとのことだった。私はなぜか中川の屋号にこだわっていたのである。私が生長して清水村（山北町川西）の小学校を卒業する頃、隣の三保村（山北町中川・玄倉・世附）のこともほゞ知っていた。又、小田原中学へ入学し、多くの人と接し、口を利き、付き合って、足柄上郡の人の姓の分布が判然として来て三保村に瀬戸という姓が無いことを確認した。

年を経て平成元年になった。山北町が主催して中川地区で紅葉祭を行った時である。祭の催場の売店の中川に瀬戸姓の存在を確かめたところ、昔から一軒も無いと言った。そうなると父が私に教えた「中川」の出身が嘘になる。それは大変だと思って、私の小学校の同級生で清水村宮原の山崎三枝さんがこの中川の地へ嫁に来て高橋姓となり、永く住んでいる。三枝さんに事情を説明して尋ねた。

三枝さんは暫く子供の頃を思い出していたのだろう、じっと沈黙していたがやがて私の眼を見て「私の父はこの中川の出身で私の実家の宮原の山崎へ婿に来た。私は子供であった当時の頃、中川の人が山北の駅の弁当屋に嫁に行ったと父から聞きましたよ。それは本当に昔のことですよ」とのことだった。幸これで中川の屋号が解明されたのである。

駅の弁当屋の屋号と言えば品川駅は香魚軒、横浜駅は崎陽軒、大船軒、国府津駅は東華軒、沼津駅は桃中軒と軒が付いている。然し、山北の中川だけが軒から外れていた。これはそうしたことだろう。これが後に至って禍いをもたらしたのであろうか。何とも不思議なことである。

中川は中川商店と言って瀬戸浦太郎氏が創立した店で山北に鉄道が開通した当初より弁当の販売をしていたが、明治二十二年（一八八九）東海道線全通を契機に駅構内の弁当の鑑札を取得し、

中川商店（岳陽新聞社提供）

非常に繁昌した。その頃足柄上郡川村（山北町山北・向原・岸）では現金収入の一番多い長者様になった、だから中川を檀家に持っている山北の種徳寺は何かにつけてご寄附が頂けるので、寺の工面は大変豊かであったと聞いていた。

※

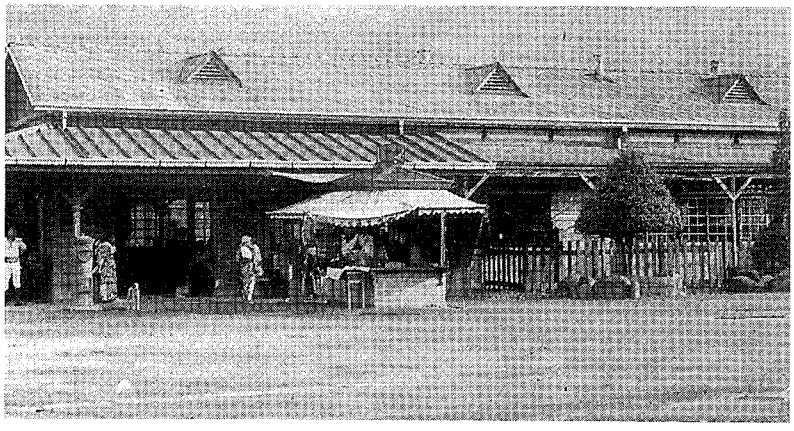
中川には「澄さん」と言う一人息子が居た。なかなかのハンサムで、村では評判の好青年であった。スポーツは万能選手で青年団の郡の競技大会ではよく活躍し、川村は他の町、村を抑えて優勝していた。これは「中川の澄さん」が居るからだと言われていた。

当時は漸く自転車が出始めた許りで、村で自転車を持っている家は何軒もない時代であった。ところで昭和五十年代末期から平成元年にかけては自転車を一、二台持っている家庭が増えたことと比べると「本当ですか？」と疑いたくなるような話しである。

当時の路上交通と言えば輓馬（馬力車）、大八車と駄馬で、一番贅沢な乗り物は人力車であった。交通事故と言えば皆無と言ってよかった。偶々汽車に驚いた馬力馬が暴走する位のもので事故にならなかった。ところが自転車が出現して、速度の早い自転車に対して歩行者が戸惑ったのである、自転車による事故が発生したが台数が少ないから件数は極僅かであった。

時代の先端を行く中川の御曹子澄さんだから、言うに及ばず自転車を乗り回していた。或る時、澄さんは路上で人を跳ね飛ばした。跳ねられた人は不幸に足の骨を折る大怪我をして小田原の名倉堂へ入院した。狭い村の出来事だからこれが大評判になって、五歳そこそこの私でさえもこの話を口にするぐらいであった。

今ならば「馬鹿じゃないか！？」と一笑に付して話題にならないものが当時は長く語られていた。これは金持ちに対する僻根性とでも言うのであろう。



昭和初期の山北駅（岳陽新聞社提供）

レチベン

このレチベンと言う言葉は鉄道用語である。「レチ」とは車掌の事で「列車長」の略である。それに弁当の「ベン」を付けたのでこれは車掌の弁当のことである。

山北駅に車掌所が置かれた頃は、山北駅で交替した車掌はこの車掌所で仮眠し、翌日所定の列車にのって勤務したのである。車掌所には給食の設備がないので、湯呑所で駅弁しか食べられない。父は車掌の監督をしていたので、中川と交渉して「レチベン」なるものを考案させたのである。

それは廉価にして、味・量共に豊富で満足するものでなければならないとした。そうなると、当然中川の出血サービスとなるので父は副食の材料は駅弁の弁当を作る際の半端物・残り物を使用し、レチ弁を同一の取り合わせに作らなくてもよい。すなわち、甲と乙の弁当の色どりが違ってもよいとしたのである。

或る時、車掌所の人達が官舎の私の家で仕事をすることになった。公用であったので父は、来ていた若い佐々木さんに中川から弁当を取り寄せさせた。個数は五個であった。佐々木さんは中川から弁当を持って帰って父に話すことには「今日は中川の店の奴はブツブツ言ってましたよ」と如何にも癪に障ると言った態度であった。父はこれを軽く受け流し「今日は余り半端物や残り物が出なくて上等のものを使ったんだろう」と言っていた。車掌所の小父さん達の食べているレチ弁を遠くから見ていたら、本当に凄かった。副食の入った折詰は実に豪華で一杯入っていて、厚いカマボコ、大きな椎茸と黄色い艶のよい玉子の揚げ物が目に付いた。見て驚いただけで遂に味わうことは無かった。思えば見たのもその時だけであったのだ。

それから年は半世紀以上の過ぎた平成元年八月であった。偶々私の一番上の姉（教子）が横浜の私の家へ来て泊った。昔話がいろいろ出る中で、レチ弁の話をしたら覚えていて「それはすばらしい弁当だったよ。食べたことは無かったがね」と懐かしそうに話した。

昭和十五年（一九四〇）、紀元二千六百年を契機に日本は戦時態勢が強化され、衣料・食糧は厳重な統制下におかれた。当然のことながら駅弁なんてものは影を消してしまった。

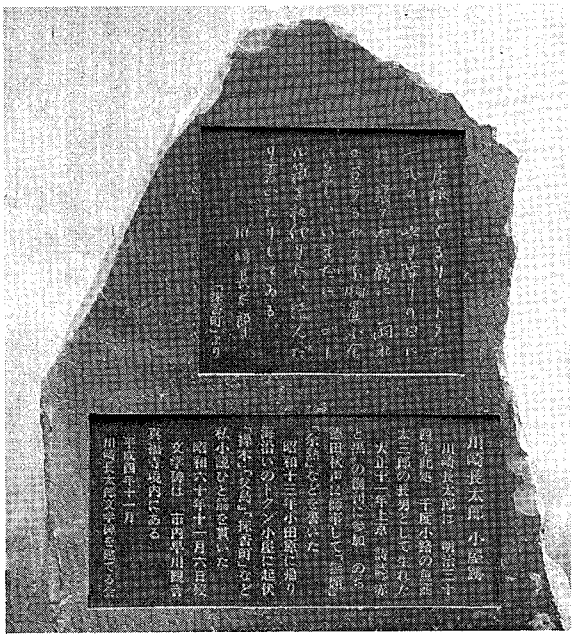
かつて繁昌していた山北

駅の弁当屋中川は昭和九年(一九三四)十二月一日、丹那トンネル開通に伴って東海道本線が小田原・熱海を通り、山北・沼津間は御殿場線という、ローカル線となってしまったので、駅売りの商売は成り立たなくなった。それで、中川は暫くの間特定の列車の車内販売で営業させて貰っていたが、売り上げは昔日の比では無く、売子の人件費も稼げない有様であった。昭和十六年(一九四一)頃中川は廃業した模様である。（続）

（付記）

この「駅弁物語」は、筆者の自分史『馬』第二集のうちの一部を再録したもので、サブタイトル、振仮名などは編者が付した。著者の名の最後の字をもじって書名としており、その人柄の一端がうかがえるが、内容になんともいえない面白さが漂い、また、郷土の歴史の証言の側面を持つものである。

川崎長太郎文学碑副碑
生地の万年町に建立



川崎長太郎文学碑はすでに早川観音境内に建立されているが、このたび副碑が長太郎氏が永年小舎暮らしをしていた万年町に建立され、さる平成四年十一月二日、その除幕式がしめやかに行われた。参列者は、川崎千代子夫人、建碑実行委員長井上和男氏をはじめ、小澤小田原市長ら関係者五十名が参集した。副碑表面には小説「抹香町」の中から次の一章が選ばれて彫まれた。

屋根もぐるりもトタン一式の、吹き降りの日には、雨水のかかるやうな物置小舎は暗い、いまだにビール箱を机代りに、読んだり書いたりしている。

彼の暮らしていた小舎は、すでに取壊されて姿を消したが、副碑はそこから五〇メートルと離れていない路傍に建てられ、長太郎氏はここを根城に、海を眺め、小田原内外をホッつき歩いたのである。小田原の万年町に生まれ、小田原を愛した川崎長太郎は小田原で没した。そして永遠に出生の地の町内に眠るのである。（掬）

百年前の主な出来事　岡部忠夫編

〈明治二十六年〉

一月　真鶴村外一町六ヵ村の相模回漕組合設立

二月十五日　小田原郵便局（旧高梨町）に於て小包郵便取扱開始

三月四日　昨年四月焼失の小田原町啓蒙学校男子部及び女子部両校新築開校

三月二十二日　天理教足柄支教会、足柄村多古（小田原市扇町）に開設

三月二十六日　福田正夫、小田原町十字四丁目九四〇番地（南町四―二―九）医師堀川好才の五男として出生

四月十五日　小田原町会、町税徴収促進のため町を二十九区に分け、各区に区長を置く事を決議。四月三十日選挙

四月十六日　報徳運動の指導者福山瀧助（小田原古新宿菓子商里見勘兵衛次男）愛知県八名郡山吉田村上吉田（南設楽郡鳳来町）で没。享年七十七歳

四月二十四日　真鶴港浚渫費用調達に充てた起債（借入金）返還の為、入港の船舶に対して入港銭をこの日から向う十四年間徴収

五月三十一日　南足柄村（南足柄市）議会、吉田島村（開成町）・南足柄村関本間の県道変更工事施行要望を決議、実施方を県に陳情することになる

五月　高木兵助、製糸工場を小田原町十字町（南町三丁目）に開業

五月　明治二十三年一月焼失の小田原町宮小路・劇場幸座、若竹座として復興。明治二十九年富貴座に改称

七月二十六日　真鶴港開港式

七月　梅謙次郎、穂積陳重、富井政幸、小田原滄浪閣に於て民法起草取調事務に従事

七月　小田原町旧須藤町の有志、緑新道に連絡して幸一丁目足柄下郡役所側に通ずる新道を開削

八月六日　酒田村（開成町）外二ヵ村組合共立開成小学校、高等科を設置、増築式挙行

九月十五日　大久保神社、小田原城址天主台に創建、鎮座式挙行

九月二十日　豆相人車鉄道発起人会開催

九月二十二日～二十六日　足柄下郡繭・生糸及び漆器・寄木細工・挽物細工の品評会、足

八十七年ぶりのお礼

露国・日露の役俘虜のこと

前編（三）

文と絵　隠岐威重

話が横にそれ、進みすぎてしまった。もとに戻す。露国を語るには、この雷帝イヴァン四世を省く事は出来ぬ。

イヴァン四世

（一五三〜一五八四）

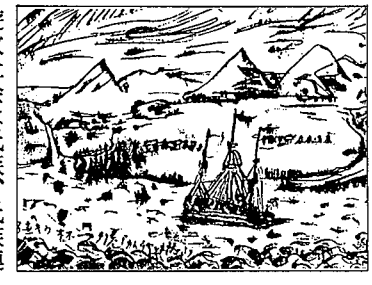
イヴァンは周辺の三つの遊牧国を破り、屈伏させ勢力を伸ばしロシア公国の礎を固めた。それは後の西欧より集めた新式銃器、それを操る彼自身の、皇帝騎士団の力によった。鉄砲は一時代前の遊牧騎馬民の馬上で射る豪弓の矢より遠くに飛び威力があった。

その新兵器を西欧に求め、その代金を東方の森に走る黒貂で支払った。黒貂、その走る宝石は西欧、特にパリの女性が競って高価で求めた。そして露国は国力を増していった。

その取り引きの担ぎ手、豪商ストロガノフの家であった。毛皮商の他に製塩・製鉄・漁業・農園経営を司り、その領地はウラル西麓まで及ぶ広大なものであった。辺境で活躍する大資本、裁判権まで持つ国家類似の実質だったが、ウラルの東麓、イルティシス河畔の草原には蒙古残留のシビル汗国があり、黒貂の跳ねるシベリアを支配していた。そして東方の大きな壁をなしていた。ストロガノフはイヴァンの許しを得て、シビル汗国を倒す案をねった。そしてコザックを使うことを思いついた。

コザック、又の名はハザク、その語源は遊牧トルコ語にある。ロシア語ではカザーク、英語読みコザック、我々はそれを使う。

いつの時代にも組織の外側に居る者がいる。いや、生まれるのだ。



遊牧社会は氏族、氏族連合の集団だが、小首長が集まり大集会を開き首長（大汗）を決める。

そしてその命に服し、遊牧の地を決め、与えられ、単位集団はその草地で暮す。有能な首長を得た集団は栄え、他を圧する。落ちこぼれが生ずる。零れた小集団は大組織の外に出る。それで自由を得るが保護も失う。

他の部族の定まった草原を犯し、そこの馬羊を掠める。大集団は怒りその盗賊を追う。ある者は殺され、貧困の中を流浪する。アウト・ロー・コザックだ

コザックは草原のみに居るのではない。河江にも居て漁民・江河の輸送の民も襲う。彼等は決して生産者ではない。草原で、河江で他が得た物を掠めるのだ。寄生虫的存在である。剽悍、狡猾だが辺境の民を武力で守りその余穀を得てもいた。

イエルマークと云う人はボルガ河を上下する大船の水夫だったが、転じてコザックの群に投じ才覚を現して首長になった。

そして、ボルガ、カマ河流域の船舶を襲い、政府の討伐に会えば河江に隠れた。政府軍に追われカマ河を逆行するうちに、ストロガノフ家のテリトリーに入った。その縁でイエルマークはストロガノフ家のシビル汗国の打倒の先兵になった。僅か五六百のコザックを率いイルティシュのシビル汗国の首都イスケルを襲った。

その小人数の軍勢がシベリアの入り口に立ちはだか

柄下郡役所にて開催

十月一日　小田原農芸発会式を挙行

十月十二日　小田原馬車鉄道、電気鉄道に変更を申請。十二月許可

十一月六日　小田原万年町一丁目百十一番地石黒広吉他六名が乗る漁船、遠州灘へ出漁途中、暴風雨に遭遇難波、二名死亡残る四名漂流中紀州大島付近にて汽船に救助さる

十一月十五日　早川村（小田原市早川）火災、十二戸全焼

十一月二十一日　岩村（真鶴町）、火災六十一戸全焼、村社一棟焼失

十二月一日　県令により足柄下郡警察署、小田原警察署と改称。なお足柄上郡警察署、松田警察署に改称は、『足柄上郡誌』にはこの年十月とあり十二月二十六日

○箱根塔の沢鈴木楼主人鈴木善左衛門、小田原御幸浜に旅館鴎盟館を開業

この年

○積少社、七月銀行条令施行に基づき小田原銀行と改称。社長今井徳左衛門、取締役益田勘右衛門、辻村泰兄、江島平八、取締役兼支配人寺西台助

○足柄下郡立養蚕伝習所、小田原町幸町一丁目百三十一番地に設置

○足柄上郡中村（中井町）雑色に相進社（繭取引）開業

○小田原梅毒病院閉鎖

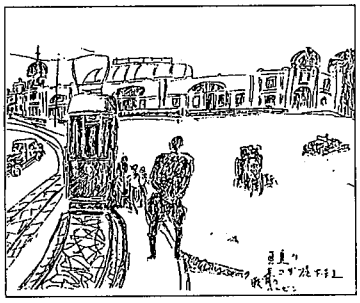
○箱根電灯会社、国産機械により水力発電を開始、明治三十三年小田原電気鉄道に買収され明治三十八年運転停止と共に撤去

○箱根塔の澤藤花楼主人電灯会社の電気を引き対岸にラムネ製造所を設置

る大遊牧国など倒せるとは思えなかったがコザックの巧みな戦略に従い敵の弱点を突き、強所をさけて進み、敗れれば一時森に隠れ、その地の民の黒貂を得て息を入れた。

その戦いの中でコッザクは新たな知識、戦術を得ていった。汗兵は意外に弱い。銃を発し、矢先の届く外で戦い、首長を倒し、銃音で馬を驚かせれば、一昔悪魔の群と恐れられた密集騎兵隊は嘘のようにもろく散じ、弱体化することを知った。そして、その戦法で二十年後、五六百の小集団コザックはシビル汗の都イスケルを陥してしまった。

モスクワの城塞にいたイヴァン四世は驚き且つ喜んだ。まさかあのコザックの小集団がこんな手柄をたてるとは。



その時抜け目なく豪商ストロガノフ家と巧妙な戦法を駆使したコザックの首長イエルマークはシビル汗国の版図シベリアと大量の毛皮をイヴァンに献じた。イヴァンは満足した。その頃はまだモスクワ国家も、一つの大きな大貴族群の一つに過ぎなかった。その広大な領土の所有は古い貴族の集まりの中で一頭高く顔を出し、旧勢力を圧え、大ロシア公国の礎を築く基になったのだ。

イヴァンは喜びの余り、盗賊イエルマークの罪を許した。許したばかりか、彼れに双頭の鷲の印をもつ鎧を与え臣下にした。

ここでコザックと云うハザクの集団が公国の皇帝の股肱になることが出来たのだ。

正規の騎士団とは別にコザックは帝の親衛隊の如きものになったのだ。

この姿は後の二十世紀のロシア革命時にコザック軍団が帝政側に付いたことも分からなくない。

わが国の幕末、将軍慶喜が上洛の時江戸の火消しを伴って行った姿に少しは似ている。また満州国時代、満軍の一枝隊に帝制時代の残党のコザックがいた事も聞いた。ここにかかげる拙画ハルピンの老コザックもその一人か。

スターリンがこのイヴァンを、毛沢東が奏の始皇帝を国祖として、たとえ思想・立国の礎が異なるとはいえ、「レーニンの前のレーニン」と讃えていることを思えば、そこに何かがある。いや、偉大な業績がある。

コザック、イエルマークは占領地イスケルでシビルの逆襲を受けて戦死したが、その後のコザックの活動は目覚ましい。六十三年後の一六四八年の間にコザックの集団はシベリアを横切りベーリング海峡、後にカムチャツカに至る。

その行動は森林の民を小銃と大砲で脅し、その地に城塞を築き毛皮税を課し、その領した地を皇帝に献じていったのだ。別の見方から云えば、黒貂の歩速に合わせて進んだわけだ。

地を起し、農を営み、岩を堀り、鉱物を求める農工鉱の跡、国を創る跡は何もない。

唯鼠に似た黒貂の歩幅に合わせて走っていったのだ。

六十三年でウラルからベーリング、カムチャツカ迄逃げる黒貂も素早いものだ。

だが、献じられた地は露領となり、その地の利用度は別として、全世界に認められ、後世に引き継がれていることは動かぬ点だ。

ピョートル

(一六八二〜一七二五)

次にロシア史上中興の祖と云われるピョートル大帝について語ろう

大帝ピョートル(一六八二〜一七二五)、イワン雷帝から空位・潜称帝を入れて十二代目、約百年後の皇帝である。もうこの時代になると東方から来た蒙古族の、その混血の、「タタールの頸木」的な恐怖は去っていた。だが、ウラル東方のシベリアの地は一応安定していたが、その地はツンドラの、森林の続く荒野でしかなく、黒豹も減り、新たに別の富を求め探険する隊を支える食糧・資材補給に苦労する処であった。シベリアの食糧不足は銘記すべきだ。地は広大であり、地下には多くの宝も蔵するが、それを興す労力を養う農業、農を培う地力がないのだ。夏期には表土は溶けるがその下は永久氷結土なのだ、これは当時も今も変わらぬシベリアの決定的な弱点である。だがこの話は暫らく措く。シベリアは一応安定している。

ピョートルの眼は西方に向いていた。トルコとの黒海を挟む対戦も、一七〇〇年には三十年間の和議で露国に有利に展開した。

だが、露国の隣スカンジナビヤ半島のスエーデンにはカール十二世がいた。ピ帝より十歳若かったが、大胆、力量、不敵な態度、指導性において周囲を驚かせた。背は高く、痩せぎすで、面長の秀でた顔、鋭い眼差し…。一時は狂乱の生活をしたが、祖国が危機に瀕すると一転変身、女に、熊狩りに、酒におぼれていた男が変じ、祖国を守る鬼に化した。その護国の鬼とピョートルが戦ったのだ。

海に憧れるピョートル、隣国との争いが一応峠を越すと、突然海辺に都を創ることを思いついた。

モスクワ、その都は国土の中央にあり、興国の昔から城塞を築き、夷人を退け

ていた。国威が定まりロシア帝国になっても国の中心であった。だがピョートルはその泥臭い都を嫌った。そして全力を挙げ、国富を傾けて、ラドカ湖よりフィンランド湾に注ぐ河畔に新都を築こうとした。草原が潮風にそよぎ、何の遮るもののない荒野に新たな都を作り出した。ペテルブルグだ。泥沼の地に無数の杭を打ち込み基礎を固め、土人を農奴を無限に使い、狂気の大声を叫び、都の建設に励んだ。

モスクワの貴族達や、外国大公使の声はピョートルの暴挙を嘲笑い、彼の考える都など出来ぬと陰口を叩いていた。だが、出来た。数年後には、ロンドンにもパリにも負けぬ市街が北海の水に映え、建物の影はベネチュアよりも美しかった。

余談だが、老人はペテルブルグ（レニングラード）を知らぬ。その地を訪れた事もないがその都を訪れた友人達の話、写真などからその美しさを知った。白亜の壁面が水に映えその影が波面で乱れ、傍らに小さいが重厚な橋の図形と。北の極地に近い水の中に映える都。その影は清潔な白鳥を思わすと信じ込んでいった。

それとは別のことだが、老人は露国の戦前の建物は非常に美しいと思っている。

ハルビンとか大連だけしか知らないが。ハルビンのキタエスカヤの石畳の道、その西側をうめる、如何にも北国の冬を意識した町並。ホテルの、レストランの、重厚な扉を飾る金文字、把手の真鍮の引き手はピカピカに研かれていた。

正教の寺院、天に届く塔、それを飾る色彩がまた美しい。（続）

材木屋綺談 その八

たかた・きくせん

大正十二年の南関東大地震で焼野原となった被災地には立ちどころに復興の槌音が響きはじめ、政府は復興院と言う特別官庁を創って大々的に復興事業に乗り出した。復興フィーバーは南関東一体を風靡し、復興節、復興音頭などと言う流行歌が巷に流れ、小田原でも復興館と呼ぶ映画館まで出現した。

こんな時である。小田原中学下の南面する城山の楠林に「福興生木大黒天」をつくる計画が囁かれたのは。もちろん復興を福興に置き換えた「きわもの」事業で

大黒天さまの有爲転変
ついに板橋地蔵尊へ

あったのであろう。楠林の大樹の一本をえらんで生木のままに大黒様を彫るという噂は、反面でとんでもない、生きたまま楠を彫れば罰があたって関係者は直ちに死んでしまうとの噂が流れた。しかしそのような噂を尻目に生木大黒天は完成し、開眼式には多くの参拝者が集まった。しかし復興フィーバーが消えると、いつしか大黒様の上屋は破れたままとなり御本尊も哀れ風雨にさらされてしまった。やがて大黒様は俵の下から切り離され付近の納屋にしまわれて姿を消した。

ある日私の家に、その棒立ちになった楠を伐り倒して呉れとの依頼があったが、父と私は不吉な噂のあった樹木を伐るなどとんでもないとにべもなく断った。しかし再三の依頼に、それではと、知合いの名古屋の業者に話すと一も二もなく快諾された。楠は早速に伐り倒されて名古屋に運ばれた。

実はその楠大樹の根元を名古屋の業者からお礼にと私は貰い受けた。悪い噂もあったその楠を私は恐る恐る掘り出して製材した。その当時この地方では楠細工が盛んで、かなりの利益を得させて貰った。しかし悪い噂は当たらなかった。何故なら父も長寿を完うしたし、私も八十歳を越えて健在である。

一方、姿を隠した大黒天はどのような事情か知らぬが、今では板橋地蔵尊の向って右手に鎮座して不敵な笑いを投げかけている。世の移り変わりの激しさ、厳しさを体験されて、俺もお前達と同じよと苦笑いしているのかも知れない。

板橋地蔵尊におさまった大黒天さま

盲目暦（二）

天野宏

太陰太陽暦

太陰太陽暦は通常陰暦とか旧暦とか呼ばれているものである。月の盈蝕を一ヵ月とした太陰暦の十二ヵ月は太陽年と約十一日の差があり、これをこのまま放置すればマホメット暦のように、実際の季節と暦日がどんどんずれてしまう。これは重大な事で極く古い時代から、色々の調整が試みられて各民族で暦が作られた。

バビロニア暦

バビロニア暦では一日を日没に始め、日の出迄を三つに区切り、更に日の出から日没迄を三つに区切った。つまり一日は六つの時刻に区切られた、之は日本の江戸時代の時刻法に似ている。バビロニアに於ける六進法による時刻法は今日の二四時間法に忠実に受継がれている。

ユダヤ暦

ユダヤ暦は紀元前九二五年頃作られた。いわゆる『ゲゼル暦』と呼ばれる小さな石灰石の板の解読によって、その当時一年が十二カ月の農耕暦を用いている事が判明した。

ユダヤ暦は太陰太陽暦であるから閏月を挿入しなければならないが、その方法は農耕暦の一風変わった条件を以て行われた。それは次の三つの内の二つ以上が合った場合に閏月を入れる事であった。その一つは穀物が未熟である事、二つは果樹が未熟である事、第三は周期が遅れている事である。その場合の閏月は最後の月アダルの後に加えられたのはバビロニア暦と同じで第二アダル月と呼ばれた。

ギリシャ暦

ギリシャは国家が分裂した都市国家で形成されていたので暦も夫々が勝手な新年・勝手な月よみを使用していた。『八年法』という八年間に三回の閏を入れる方法である。西暦前五世紀には『メトン法』が天文学者メトンにより提唱され、これは十九年に七回の閏月を置く方法でかなり正確なものであった。

ヒンズー暦

ヒンズー暦は古代文明発生地のインドでは、非常に古い時代から暦法が発達している。紀元前一五〇〇年頃編集された経典『リグ・ベーダ』には太陰太陽暦が記されている。ヒンズー暦ではインドの気候季節を表しているように、一年が冬・夏・雨の三季になっていて更にそれが半分に分けられる。冷季（タバス・タパシャ）・春季（マズー・マダバ）・夏季（スクラ・スシ）・雨季（ナバス・ナバシア）・秋季（ウサ・ウルジャ）・冬季（サハス・サハシャ）となっているのである。

古代ローマ

古代ローマでは狼に育てられたという伝説上の君主ロムルスが制定したという暦があるといわれるが定かでない。一年が十ヵ月である。

ヌマ暦

ヌマ暦は第二代の君主ヌマにより制定されたというが、この暦では一年の長さは十二太陰月とほぼ等しい。この暦では閏の置き方が一定でなく、当時権勢を誇っていたローマの高僧団達の御都合で運用されていたらしい。例えば負債の多い時には閏月を挿入して返済の時期を延ばしたり、政敵の任期を短くする為には、置くべき閏月を省略する手段を採っているのである。またフラチェスという人物の如きは神殿に忍入り暦書を盗みだし、勝手に日付を直し納税者の歓心を買ったという不祥事も起こった。ジュリアス・シーザーはこのような時代に暦の改革（太陽暦の導入）を試みざるを得なかったのである。

中国の暦

中国では非常に古い時代から十干と十二支を組合せた六十干支が、暦の仕組みの中で重要な役割をはたしていた。殷の都の跡から発見された多数の甲骨文の中に六十干支表があることから干支が殷の暦に重要な位置にあったと考えられている。十干はもともと殷の暦で一カ月を上中下の三旬に分け、旬の日付を示す記号で、旬の第一日が甲、第二日が乙と云う具合に使用されたもので、一カ月三十日の殷の暦では干支は二ヵ月で正確に一巡する仕組であった。これでは一年が三六〇日であるから五日と四分の一が余るので、第十三月を時々入れている筈である。殷の次の周王朝の暦法は孔子の編集した『春秋』に記録された日の干支や日食の記事により知ることができる。暦法を制定するのが天子である事の象徴となり、革命により新王朝を建てたとすれば、その度に新しい暦法を制定しなければならなかった。

中国暦は中国文化の影響を受けた近隣諸国によって、そのまま使用された。

日本・朝鮮・越南等の諸国は、生活の上でも、文化の上でも中国の恩恵を受ける点が大きいので、近年迄中国暦を使用していた。

太陽暦

エジプト暦や現行のグレゴリー暦その前のユリウス暦など、太陽年を一年の単位とする暦法である。季節とのずれは無いが月の運行と一致しない欠点がある。

エジプト暦

エジプトの輝かしい古代文化の発生はナイル河の氾濫による所が大である。古代エジプトの一年は三つの

季節に分けられている。第一季はアケトつまり『洪水』、つまりナイル河の氾濫である。この時期は大犬座のシリウス星が日の出の直前に東の空に姿を表す時期と一致するのである。その第二季はペロイエト『芽生え』、第三季はショム『欠乏』で作物の収穫後、次の増水迄の減水期を表している。この時期シリウスは太陽の運行と良く一致していたので、正確に夏至の時期に太陽と一緒に姿を東の空に見せ『洪水』を予言したのでシリウスは神格化され『ソティイス』と呼ばれていた。シリウスの周期と合わせる為に、三年毎に一月の閏月を加えなければならなかった。

ユリウス暦

ジュリアス・シーザーは西暦前四九年に政敵ポンペイウスを倒してローマの実権者となり、二年後には終身独裁官となった。それ迄誰も為し得なかった暦法の改正に着手した。彼はエジプトのアレキサンドリアの数学者ソシゲネスの助言を受けて暦法を制定した。つまり一年を三六五日四分の一と計算し、平年を三六五日、四年毎の閏年を三六六日としたのである。

日本で作られた古暦

律令制度の行われていた頃には暦は毎年陰陽寮で作成された。筆写作成されるにはその数は限りがあったので、中央・地方の宮司に限って配布された。したがって一般の貴族や地方豪族は官からの配布暦を私的に筆写して日用に供していた。鎌倉・室町の頃になると次第に暦の需要が増えて、木版刷りの暦（版暦とか刷暦といわれる）が現れた。又地方暦が出現した。東北地方に会津暦、関東地方には鹿島暦・大宮暦・三島暦、近畿地方に京暦・南都暦・大阪暦・丹生暦がある。中世以後には会津・三島・京・南部・丹生暦等が残り、新しく伊勢暦・江戸暦・薩摩暦又仙台暦・泉州暦・弘前暦・秋田暦・盛岡暦等が加わった。

大宮暦

武蔵国一の宮である大宮氷川神社から頒布されたものであるが起源は明かでない。三島暦と同時代に頒布されていたのであるが、時の北条氏政の奉行職である安藤豊前之守の裁定に敗れてそれ以後発刊される事が無かったという。安藤豊前之守は北条氏政が家督をついだ永禄三年（一五六〇）から子の氏直に家督を譲った天正六年頃（一五七八）迄の間に仕えた人物であるのでこの頃迄大宮暦が出ていたと考えられる。然し三島暦の河合家の史料によると、慶長九年（一六〇四）大宮の暦師が三島暦の偽暦を作り、その罪により遠島に処せられる所を河合家の家人とする事で許されたと云う記録がある。之によると北条氏政の処分は一時であり、その後も大宮暦はだされていたようである。然し今では残念ながら実物は残っていない。が少なくとも処分以後も暦師がいたことは事実のようであるが人気は落日であったらしい。

三島暦

京暦についで起源が最も古い。河合家の伝えによると、奈良時代の宝亀年間（七七〇～八〇）に河合某が伊豆の国三島に土地を賜り、天文台を設けて作暦したのが始まりであるという。然し室町時代より以前の記録はなく、又実物も存在しない。最古の三島暦は、足利学校所蔵の『周易十巻』古写本の表紙裏に用いられている永享九年（一四三七）のものである。この暦は仮名版暦で、之は最初から九月十五日迄の部分が断続的に残っているだけである。この暦は巻暦であったらしい。三島暦は河合氏が三島大社から伊豆・相模・武蔵・甲斐・信濃等の諸国に頒布されていた。又後北条氏により大宮暦が禁止されてからは南関東唯一の暦であったし、天正十八年（一五九〇）徳川氏の関東入国以来は貞享改暦迄、永く幕府の暦であったと考えられる。

鹿島暦

室町末期の古文書によると、利根川中流地方から常陸国一円にかけて、鹿島神宮から頒布された独自の暦があった。今では水戸市郊外の六地蔵寺（六蔵寺）に残っているにすぎない。この寺にはこの暦の草書が数年分保存されている。

会津暦

福島県会津若松の諏訪神社から頒布された暦で、永享年間（一四二九～四〇）に許可を得て配布された。現存する最古の会津暦は活版印刷で寛永十一年（一六三四）のものである。会津暦は、享保頃の記録によると、米沢・福島・二本松・白川・大田原・喜連川・宇都宮・越後・秋田・日光・最上・岩城・相馬・三春等に頒布されている。

京暦

古くから経師により巻暦仕立にて頒布されていて、室町末期には刷暦座（版暦の座）が存在していて、三島暦職とも呼ばれていたが、江戸時代になると大経師（浜岡氏・降屋内匠）の独占となり、ついで慶長十八年（一六一三）の後陽成上皇の許可を得て院御経師が加わり、この二家が京暦の作成頒布を行った。大経師家は暦屋の総元締として家格も高く、頒暦数も多く、常に院御経師を凌駕していたが、貞享改暦の直後に例の内儀おさんと手代茂兵衛の密通事件があり、又新暦の販売独占を計って改易となり、縁者の茂兵衛なるものが家督を継いで降屋内匠と名乗る事となり、以後幕末迄続いた。幕末には中嶋利左衛門・河合弥七郎が加わり四軒の京暦の頒布元となった。

（続）

久野古墳と謎を語る山肌の石

小野　薫

久野の台地には九十九塚（百塚）とも呼ばれる横穴式石室の古墳群がある。

五輪や九輪塔の添えてある事から、人それぞれに、鎌倉時代の武将達の墓だとか、或いは天正の昔秀吉、小田原総攻撃の際の両者の武将、雑兵の墓だとかそう言われて来た。

話し変わって大東亜戦争の前後、国を挙げて食糧増産が叫ばれていた時、一坪の空地も利用しなくてはと言う事もあって、久野百塚と呼ばれる古墳群も、大半は食糧増産の名を借りて無残にも破壊され塚は畑に、石は「けんち石」に利用されてしまった。現在元の状態で姿を止めるものは数える程になってしまった事は誠に残念である。

また、道祖神や古墳を私有地としてお買い願えませんかと隣接の地主さんに、たびたび国のお役人さんが見えた頃もあった。

しかし敗戦から立ち直り、国の誇りの何たるかをいち早く悟った人達により文化財保護委員会が設けられ、開発による破壊寸前の文化財にストップがかけられた。

だが文化財保護の下に乱発堀や調査が全国的に始まり紙上を賑わした。

そうした中で久野古墳も有名人の指導の元に地区有志の協力を得て、昭和二十六年（一九五一）の秋学術発掘調査が行われた。千二、三百年も前の古墳であるいくつもの証が立てられたが、一つ一つの古墳の内容は皆異なり、久野の発掘調査は今回が最初で最後であってほしい。科学の進んだ後世の人達への何よりもの贈り物として残すべきであり、私達の務めであると郷土の有名な方が主張されている。

現在の科学、未来の科学を見尽しての立派な発言であると、ただただ頭の下がる思いである。

※

今から三十年も前のある日郷土研究家の方が私用で我が家に見えました。そして据え付けてもうかれこれ六、七十年にもなる、古びた庭石の一つ二つを見るやいなや目を光らせて

「これは古墳の石ですね？」と言われるではないか

「しめた」

その瞬間私は心の底でそう思った。

何しろ生涯賭けた考古学研究家の瞬間的な「ヒラメキ」の声だからである。

庭石と古墳群の私なりの調査はその時から始まった。

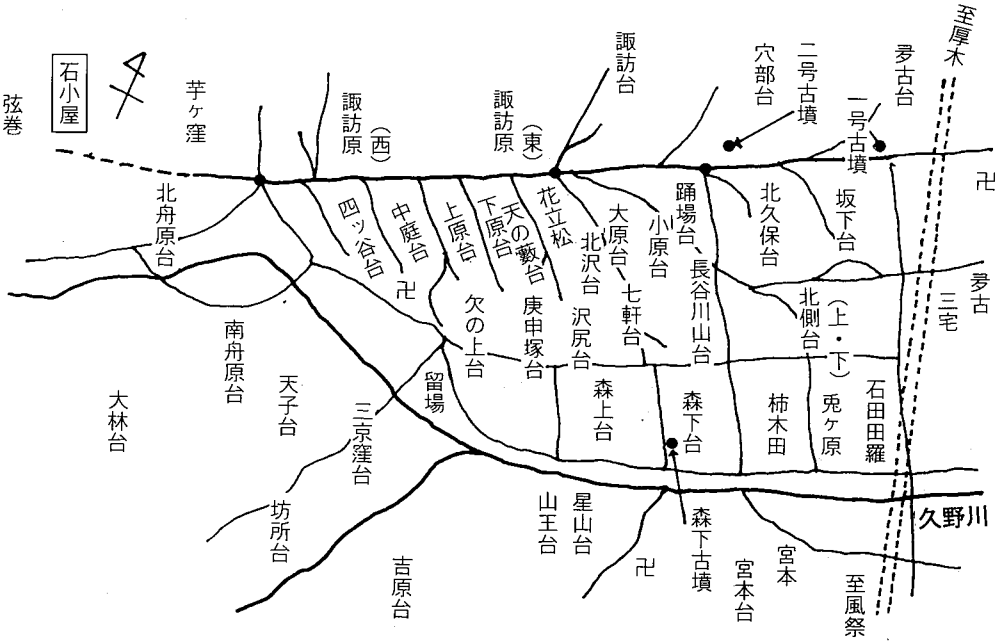
この庭石が久野古墳群の謎を解いてくれる鍵になるかも知れないと思ったからである。

久野の石にはいくつかの貌がある。

大まかに、箱根外輪山に近い赤（黒）石の「溶岩」芥の塊状の軽石や釜石、硬軟二層になった涙石、庭石やけんち用の久野石、又石の大小、色彩、形状、風化の状況によりその石の生い立ちが推察出来る。

「軒の雨垂れ岩をも貫す」の諺の如く久野川の上流の山の中に幾世代を経たかも解らない丸み或いは偏平な大きな石が今なお、風雨に

推測図　久野字石小屋より久野古墳群への石材運搬ルート



晒され形や位置を少しずつ変えている。

ところが、現在まで川になった事のない様な別の山肌に、或いは土中に同じ丸味の石、角のとれた偏平な石がたくさんある事は大変不思議である。

かつての氷河時代に遡り洗い磨かれた石などが、ある時、土砂と共に山頂から山津波状に押し寄せ、或いは少しずつ扇状地を作り現在の山肌で石が止まったのではないかと、明神の山波、各尾根の起状の状態を推測すると、ふとそんな思いがする。

それにしても一つの庭石と古墳の石とは仲間同志であると言うお墨付きをいただいた事は私にとっては、何物にも変えがたいお言葉である事を感謝する次第である。

※

お墨付きの庭石は、先々代が久野古墳群の西端より約五百メートル遡る、久野字石小屋の自分の山から数人で引き摺り下ろし大八車で家まで運搬したのだと言う。

謎を語る石　久野字石小屋

石小屋の上に「字弦巻」がある。藤蔓が巻くように生えている事からそう呼んだのだろうが、古代に於ても蔓の巻く如き弦巻だったに相違なかろう。

久野古墳を作った足柄平野の豪族達は、多数の下人足を使い、偏平な石を選び、藤蔓で編んだ縄で絡め、橇にて引き摺り運び、何年もがかりで幾つもの古墳を築かせたのではないかと思われる。

もし、久野川を越えた南面の山から或いは酒匂川を越えた他郷から久野の台地まで大量の大石を引き上げる事は当時としては「ピラミッド」建築に匹敵する大事業だったであろう

多少の年代差こそあれ、田島の横穴墓を見ても、それぞれの地の理を生かした資材工法が入れられている。久野古墳群然り。石小屋の石を使用したと思われる。

なぜなら石小屋の山肌より現在の一号古墳までの起伏を均して本通りとすれば、あとは通り下の沢や窪を避けて尾根を下れば各所に古墳の村が容易に出来る。

この間僅か二、三キロ程度である。足柄平野の豪族達にふさわしい規模と数であったのではないか。

例えば石小屋、古墳一号通りが出来れば途中の花立松より一気に七軒の尾根を下れば、久野川添の字森下の古墳まで直行できるし、その両端の平坦地に幾つもの古墳を作る事は容易である。

もし、石小屋の石と古墳の石は兄弟分であるならば、古墳の石の出生の謎が解ける。現在山肌に残されている丸に三つ葉柏の紋の入った石は江戸時代の石切場の石長の領域を示す印であったにせよ、その南面を向き苔むした石は私達を見守り古墳への謎を投げかけているようだ。

石曳き用の木ぞり修羅

(インドネシア・スンバ島　スンバ族)

車のなかった古代、飛鳥の石造物や巨大な古墳用石材を運ぶのに用いた運搬具を、わが国では修羅と呼んでいた。しかし、その実物は残されたものがなく、永らく謎のままであった。それが昭和五十三年(一九七八)の春、大阪府下の一古墳から実際に発掘されたのである。しかし、この時見つかったものとほとんど同形式の修羅がスンバ族の中で実際に巨石を運び、墓を作るために制作し、使用しているものであった。

この修羅は"クリヒ"という堅木の二股をくりぬいて造られたもので、本体には、乗せた石を安定させる横木がほぞ穴を通した樹皮で結わえられている。先端には、祖霊が到来する際の目標になるという旗竿が立つ。"石の馬"と呼ばれるスンバ島の修羅は、集落内の墓地に巨石を組んでドルメンを築く時、集落から数キロ離れた採石場から石を運び込むのに用いられている運搬具である。

(『東南アジアの島々』より抜粋)

(付記)

久野古墳群の横穴式石室の天井石・側壁石などの石材については、酒匂川の支流である「狩川が箱根外輪山裾が流れて大小の岩塊を運んできたからである」とか、「久野川の岩石が利用された」というような考古学の専門家の見方や考え方とは、全く異なった小野薫氏(久野史談会副会長)見解には、非常に興味深いものがある。

筆者は久野の歴史に関心を持たれ、鋭利な観察をされてきている。この一文は、昭和六十二年(一九八七)十月、整理コピーされた貴重な論証であるので、本誌に掲載させて頂いた次第である。

(岡部忠夫)

内田清氏の古文書講座は都合により次号に掲載します。

三月十日東京大空襲を顧みて（二）

松本巽

ようやく新式の高射砲が到着

待ち兼ねていた新式の高射砲が、第十号陣地に駐屯する独立高射砲第一大隊に配備されたのは、昭和十九年（一九四四）五月のことである。

この頃わが軍は、南方戦線では死闘を繰返し、戦局は日に日に不利な状況に追い込まれた時期である。

続いて六月に入ると、十五日に、米軍はサイパン島に上陸、日本軍は玉砕。十九日、二十日のマリアナ海戦では航空母艦の大半を失う完敗をしているが、私たちが知るのは、勿論戦後になっての事である。

第十号陣地は、いまでは東京中央区有明町の一部となり、私たち第四中隊の陣地であった場所は、装いも新たに「有明テニスの森公園」と成っている。桑畑がいつの間にか変わって海となるという諺はあるが、ともかく、昔の面影は全くなくなっている。

99式8センチ高射砲薬莢と筆者

第十号陣地に布陣の独立高射砲大隊は、四箇中隊編成で、一箇中隊は、観測班と二箇少隊の六箇分隊から成っていた。

第一、第二、第四の各中隊には、九九式八センチ高射砲が、中隊長が陸軍士官学校出の第三中隊には、三式十二センチ高射砲が、それぞれ各分隊一門宛、計二十四門が装備された。

ところが、どういう訳か防衛庁編纂の『戦史叢書』には、独立高射砲第一大隊の編成は、五箇中隊から成り、高射砲の配備は、七センチ六門、八センチ十八門、一二センチ六門と記されている。

第十号陣地に実際駐屯していたのは四箇中隊である。七センチ六門装備の一箇中隊は存在していなかった。どのような訳によるものであろうか？

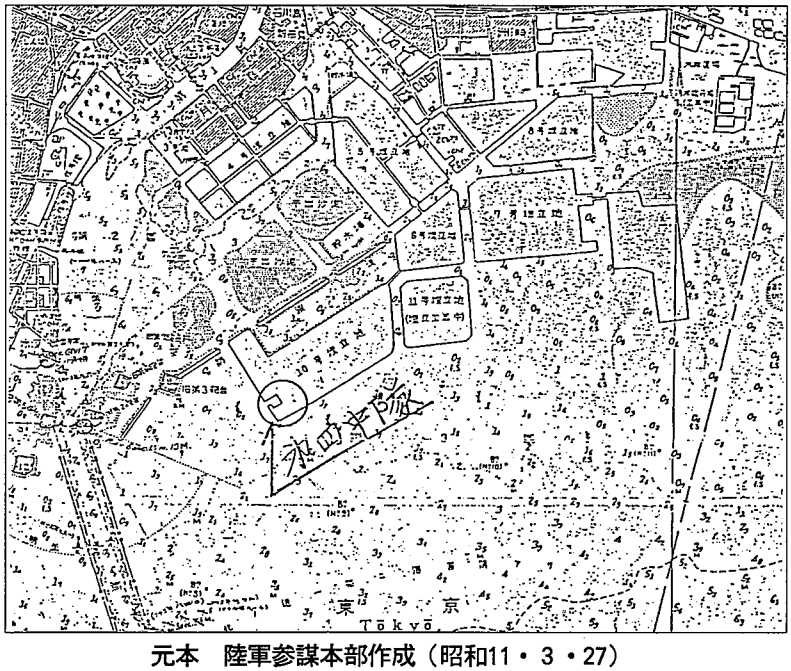
しかし、その訳を知る由もない。

前号で第十陣地に「新鋭の九九式が布設されることになっていた」と記したが、前掲の『戦史叢書』を調べてみると、最新鋭の高射砲は、僅か二門しか完成していないことが分った。

もっとも、当時、私たち将兵にとっては、軍の装備については、狭い見聞しか持ちえなかったので、九九式を新式とみたのも無理ないかもしれない。九九式が到着する迄は、旧式の野戦高射砲で訓練していたから、中隊長以下、九九式を新鋭なものと受けとめていたのである。

それで以下、高射砲の変遷の概要を、『戦史叢書』から引用したい。

軍の主兵である日本の歩兵が、旧式な明治三十八年（一九〇五）制定のいわゆる「三八式歩兵銃」を肩に開戦以来全線に展開し世界の列強と対決していたころ、陸軍の高射砲隊も昭和



元本　陸軍参謀本部作成（昭和11・3・27）

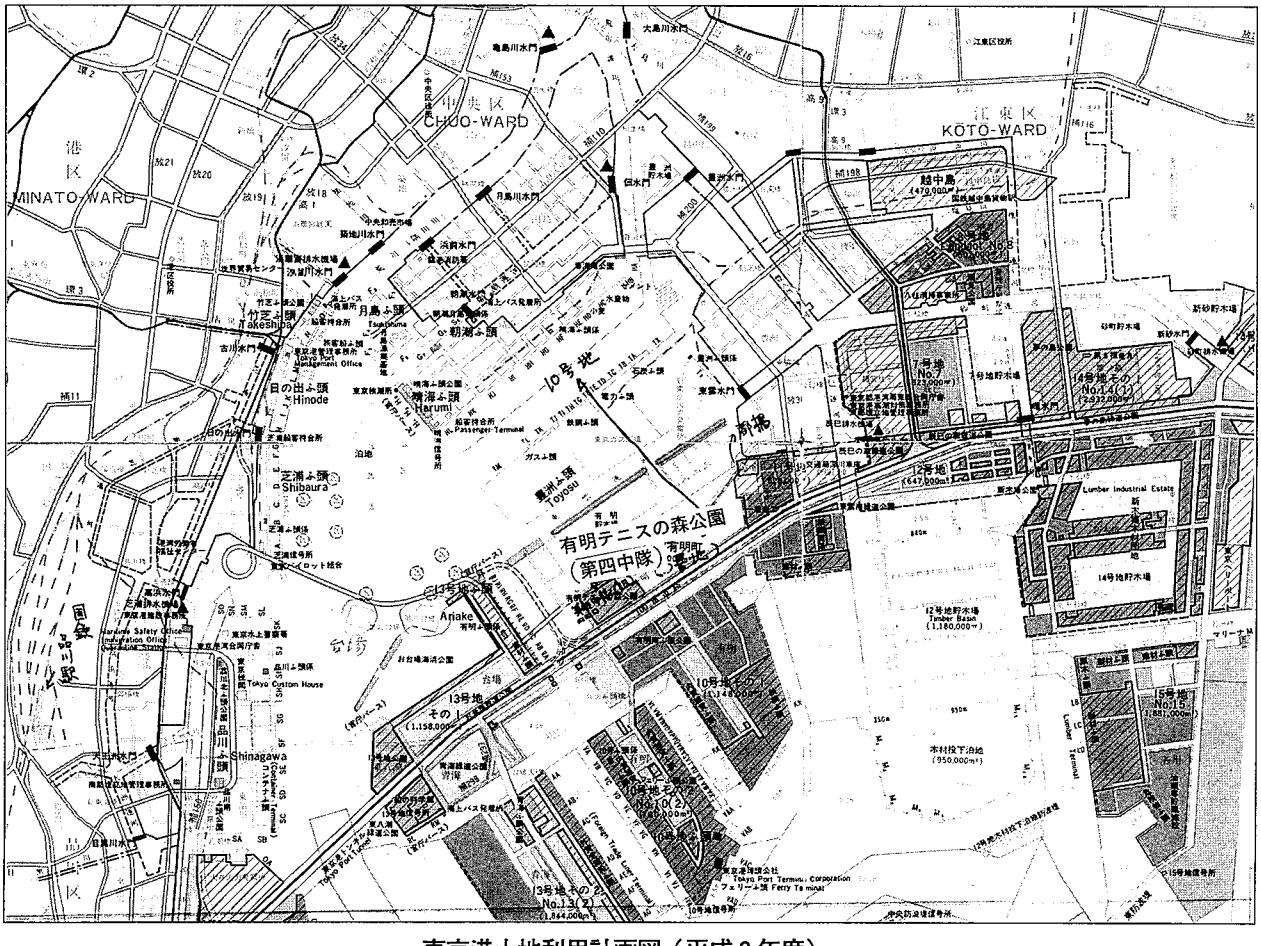
三年から十五年（一九六～四〇）に制定された口径七～八センチの旧式砲で戦った。その性能は、初速七二〇メートル、最大射高九、〇〇〇メートル、有効威力はせいぜい高度六、〇〇〇メートルまでの野戦高射砲で、その後敵機の高々度、高速化に対処するため一二センチ砲の開発とさらに七センチ砲の改良を研究し、昭和十八年ごろ陸軍は、これを要地防空用に制定した。だがその後のB29情報から、有効射高一一、〇〇〇メートル以上のものが必要と考えられた。しかし実際には、前期一二センチ砲でも最大射高一四、〇〇〇メートルで、したがってその八割の有効射程ではまだ不十分であった。そこで陸軍は急いで高射砲の大口径を進め、一五センチ砲完成をめざし、十九年末に完成したが、わずか二門で威力を発揮することもないままに戦いは終わった。

がんらい陸軍の高射砲隊は、進攻作戦用として国防軍より外征軍の強化に力をそそいだため、このときB29を迎えて多少の改良はなされたが、ほとんどが旧式砲のまま空戦にのぞんだことになる。

九九式八センチ高射砲が開発着手されたのは、昭和十四年（一九三九）である。当時ためらいなく用いられていた皇紀でもうせば二五九九年となる。その末尾二桁をとったものである。第三中隊に配備の三式十二センチ砲は、皇紀二六〇三年つまり、昭和十八年（一九四三）の制定を意味している。

九九式八センチ高射砲は正確には八・八センチである。

写真の薬莢は、私が終戦後、その年の十一月迄残務整理を命じられた関係から所蔵している。砲は米軍に接収されたが、米軍は薬莢など見向きもしなかった。当時物資が不足していたので、真鍮製の薬莢は花立ての代りになりはしないかと、記念に持ち帰ったものである。径は八・八センチ、高



東京港土地利用計画図（平成3年度）

さは五十五センチある。

九九式の有効射程は、一万五千メートル余、実際の有効射程は一万二千メートルであった。

この砲は、『世界兵器図鑑日本編』(小橋良夫著　昭和四八年国際出版発行)を調べてみると、面白いことに、日華事変の初期、中国戦線で捕獲したドイツのクルップ社製の高射砲がモデルになっていたという。

この砲の水圧式駐退機構(発射の反動を吸収する装置)は簡単で製造しやすく、また、日本陸軍の野戦高射砲より優れた点が多く、固定砲架式でありながら、六つのブロックに分解、搬送出来た。そこで、陸軍はそのまま、そっくり採用した訳である。口径は、もちろん八・八センチで、ただ、照準具だけは、日本の型式の電気照準具を装着したのである。

ついでに三式十二センチ高射砲を前掲兵器図鑑で調べると、最大射程二万五百メートル、最大射高は前述のように一万四千メートル。弾丸は砲手一名が、砲まで運び、砲尾の近くにある装弾臂により自動に装填が可能であった。

また、二門しか完成しなかった十五センチ高射砲は昭和十八年十二月設計開始以来十七ヵ月で完成。おそらく世界中で、この種の火砲で、これだけ早い完成はなく、試験の結果、初速九百三十メートル、最大射高二万メートル、発射速度一分間十五発の素晴らしい出来であったという。

この砲は東京杉並区久我山に据えられ、何回かの空襲のたびにB29群に大打撃を与えたため、B29は久我山の上空を避けて飛来したとの事である。

終戦により、米軍は日本に進駐すると、調査団は久我山に直行、十五センチ高射砲を見て息をのんだ。

「ワンダフル！」

そして一門はその場で破壊し、一門は米国に持ち帰ったと、伝えられる。

九九式八センチ高射砲は三式十二センチや十五センチ高射砲に較べて性能は劣っていた訳である。

しかし、私たちは新式な高射砲と受けとめていたのは、前述の通りである。

九九式を直接操作する要員は、照準砲手兵二名と、弾丸に信管の装置をする兵、弾丸を砲身に装填する兵、発射装置の拉縄(らっしょう)を引く兵の各一、計五名で、旧式の野戦高射砲操作に要した兵員十二名に較べると半減以下となった。

また、旧式では観測班から伝えられる方向、高度、航速、距離を、中隊長が受け、各分隊に指示、各砲手は砲に装備された機器にセットする必要があった。

しかし九九式では中隊の観測班が測定した方向、高度、航速、距離の数値を中隊長の指揮台に設置された「算定具」にセットし、敵機の未来位置を計算し、砲に装着された計器に電流を通じ送る仕掛けになっていた。計器は、丸型で砲身の左右にそれぞれ一個ずつ装着されており、右側は敵機の方向左側は高低に係わるもので、二人の照準砲手が別々に操作する様になっていた。はっきり記憶しているわけではないが、たしか0から9の数字が配列されていて、0が頂点に表示されて指針を合わせるようになっていた。

中隊長が拡声機(マイク)で、例えば「右前方の敵機」と指示が与えられると、照準砲手は、砲身を敵機の方向に向け、あとは計器の指針を0に合せるように砲の轉把(ハンドル)を回すだけで砲身は観測班が測定した敵機の未来位置に向きをとり、信管の秒時も同時に決定されるようになっていた。

「よし」と、各分隊の二人の照準砲手の操作完了の掛声は、ほとんど同時であった。間髪入れずに各分隊長の「よし」の合図に中隊長は「発射」の号令を下す。六箇分隊は一斉に発射。その瞬間地軸を揺るがす轟音と共に、照準砲手の体は砲坐は固定されていても砲と一緒に浮き上がる。このときの第一、第二の二人の小隊長は、中隊長の補佐の役を担っていた。

ついでに、私が所属した第四中隊の幹部将校、下士官の職・官・氏名を挙げると次の通りである。

中隊長　折口範雄中尉
(昭和二十年一月頃大尉に昇進　鹿児島県出身)
観測小隊長　大友少尉
(後に中尉　山形県出身)
第一小隊長　飯高少尉
(後に中尉　山梨県出身)
第二小隊長　高橋實少尉
(昭和二十年五月頃転出　神奈川県山北町出身)
同　吉村少尉(東京都出身　高橋少尉転属後)
人事係　山口准尉
事務係　清水曹長
同　平野軍曹
(清水曹長病気入院後、後に曹長)

中隊全体の定員は、将校四名、下士官九名、兵約百二十名であった。　(続)

―古刹秘史―
浄永寺

星野幸一

一、谷津山と寺観

JR小田原駅の西口を出ると正面には谷津山(現在の城山地区)である。

駅前広場には平成二年四

月市制五十周年のメモリアルとして、馬上に跨る北條早雲の銅像が建立されたのである。広場を抜けて入谷津へは、だらだら坂の一本道であり、両側の傾斜地は雑木林やミカン畑であったが、近年、宅地造成が進み谷津山は住宅地として景観を一変したのである。

この道の中程右側に白地に黒ペンキで「七面山谷津浄永寺」と書いた標識が立っている。手前の参道を登って境内に入ると両側には梅の老樹が並び、右手前に稲荷大明神の大きな祠がある。突当たりに本堂と庫裡、左手の石段を登ると七面堂である。主神の七面大明神、そして毘沙門天、妙見菩薩が武人の神様として合祀され俗塵を離れた佇まいは七面山とも云い七百余年に渉る法燈を伝えてきたのである。

浄永寺参道入口　平成三年・五月二九日撮影

二、略縁起

天保三年（一八三二）四月三十世日貴上人が誌した寺伝によると浄永寺は鎌倉幕府の執権北條時宗の家臣で風祭の地頭（鎌倉時代に村の管理や租税徴収にあたった職名）大野亮光秀が日蓮聖人に帰依して弘安三年（一二八〇）自分の屋敷に法華堂と七面社を建立したことが始めとされている。

光秀の宗旨は真言宗であったが建長年の中頃日蓮聖人が当国通行の砌、一宿されてから深く尊敬しその後職務上鎌倉参勤の折には松葉ケ谷の草庵へ詣で聖人の説法を聴いて改宗檀那となったのである。

聖人が文永十一年（一二七四）五月鎌倉から身延へ参られる途次、酒匂村の法船寺に一宿、それより風祭大野宅に立ち寄られ房州の方を眺め御両親の回向をされたという。聖人はそれから身延山に閑居されたのである。

光秀は常に聖人を慕ひ弘安三年（一二八〇）の冬、霊夢を感じたので直ちに発足して身延の草庵を訪ね聖人の尊顔を拝したのである。

聖人は懐かしく思召され暫くして訪問の事が終わると、遥々当山を訪ねきたことは労心の至り。仏神でなければ誰が汝の信が解ることだらう。今、幸いにして与える本尊があると御手ずから二軸を授けられた。

光秀が有難く頂載して拝覧すると、一軸は輪円具足の大曼陀羅、一軸は蛇身・解脱の画像であり、奇異の思いに感涙を催したのである。

聖人は汝の地に一宇を建立して法華弘通（御題目を広める）道場とするよう仰せられ光秀は帰宅後屋敷内に法華堂を建立して大曼陀羅を収め、身延山で拝した読経中の聖人の尊顔そのままを彫刻した尊像を安置した。聖人御年五十九才の尊顔である。

又後ろの山の頂きに社を構え蛇形の画像を（女人成仏を意味する聖人直筆の説法画像）安置し夢に現れた童女の顔形を彫刻してこの木像を末法の守護、七面大明神として勧請した。

光秀が夜明けに御題目を唱えていると門前に聖人が在すようで不思議に思いお出迎えした。

弘安五年（一二八二）九月八日聖人は身延山を出発して十二日には光秀の宅へ立ち寄られたのである。

聖人は先ず法華堂に入られ法華の弘通大道場なりと悦ばれ夫婦の名を寺号とすべしと仰せられ光秀山浄永寺と名づけたのである。

さてかの木像を御覧になり「誰が彫刻ぞ」と尋ねられ件の趣を申し上げたところ、聖人はその志を感じ読経開眼され、日蓮三十年の間、身命を惜しまずに法華経を弘通した功徳はこの木像にゆずるべしと申された。

時に光秀に一子あり。聖人は弟子として日行上人と名づけられ浄永寺の開山上人とした。

旧地名保存碑
入谷津

早雲以来歴代城主は寺の造営に拘ってきたが七面宮に北條家の利運を祈願したのである。

寺は江戸初期より紀州徳川家の祈願所として庇護を受け繁栄してきた。また、家康の側室お万の方が七面大明神を厚く信奉し、天下の長久を祈り自分の着ていた打掛けと家康公の陣羽織を切れ地にしてこの画像を表装したのである。

明治以後旧藩士たちは離散して檀家も少なくなったが昭和初期には七面山の大祭がある九月十九日には県内各地から大勢の人が参詣したという。

三、小田原城の興亡と浄永寺

箱根外輪山の東端、塔の峯（標高五六六米）から派生した尾根ルートの末端に当たる小峯、八幡山は小早川、大森、北條の三武将が中世小田原史にインパクトを与えた興亡の舞台である。

その歴史的経緯は治承四年(一八〇)石橋山の合戦で源頼朝に協力した土肥氏が早川庄(今日の酒匂川以西の小田原市)に進出、土肥実平の長男小早川弥太郎遠平が城を構えたのが小田原城の開祖である(年月不詳)。応永二十三年(一四一六)上杉禅秀の反乱が終わると公方(鎌倉時代将軍を助けて幕府の政務をつかさどった重職)足利持氏は駿河の大森頼春の功を賞し土肥・土屋の領地を取り上げ頼春に与え大森氏は城を築いて五代八十年相模全域に君臨したのである。

明応四年(一四九五)北條早雲は大森氏に箱根山での遊猟を申し入れ受け入れられると鹿狩に擬して山中に入り夜陰に乗じて小田原城を乗っとってしまった。大森藤頼を眞田城(平塚市)に追い払って野望を果たした早雲から五代百年北條氏は関東制覇を成し遂げたのである。

早雲はこの戦いで火牛の計を用い千頭の牛の角に松明を結び、大軍勢にみせかけたと伝えているが牛の徴発方法や集結地点・攻撃準備(材料の調達と松明の固定)や戦闘加入のタイミングについては定かでない。

この戦法は木曽義仲も用いている。壽永二年(一一八三)北陸路の雪解けを待って平維盛の大軍は加賀・越中の国境、礪波山へ向かい倶利伽羅峠に陣を張って義仲と対戦した。

いくさ上手の義仲は夜半平家軍の後ろにまわり角に松明を結びつけた牛の群れを敵陣に放ち、ときの声をあげて突入、一万余の敵を谷に落としたという。だがそれでは牛も火をおそれて前へは進むまい。嘗て作家の村上元三氏が「後世の史書の創作であらう」と云われたが早雲が用いた火牛の計も疑念が持たれ銅像の牛の松明には不信感を覚えるのである。牛は人間と異なり両眼が顔の前面についておらず左右にあるため視野は広くとも近眼で遠近感に乏しく特に火をみると驚きあばれ出す性癖があるので敵前で松明の火付け役を務めた兵士たちは牛の遁走に狼狽したことだろう。一人で何頭を火付けたものか千頭の牛は狂奔して猛牛となり逃げ場を失った兵士たちは死傷者も出たことだろう。

火牛の計は中国の戦国時代、斉の武将田単が燕の勇将楽毅と火牛の計を用いて戦い七十余城を取り戻したと史記、田単列伝に誌されている。

城中から集めた千余頭の牛に赤絹を着せて角に兵刃を束ね尾に葦を縛り油をそそいで火をつけ城壁に數十の穴をあけ夜陰に乗じて敵陣に放ち大軍を蹂躙潰滅したという田単の奇策である。牛の尻を火傷させながら驀進するというアイディアが敵の意表を突いたのではなかろうか。

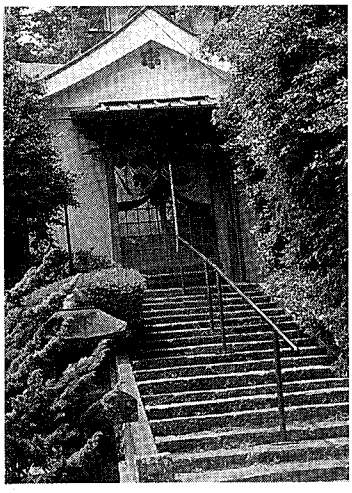
早雲は築城に当たり風祭が要害の地であったため浄永寺に替地として谷津山の山林竹木を賜わったのである。

因に『風土記稿』によれば天保十二年(一八四一)の谷津村は戸數十八戸。開山当時の谷津山はまだ原生林であり、雑木林で深々とつつまれ竹林、野山で荒涼とした風景であったろう。

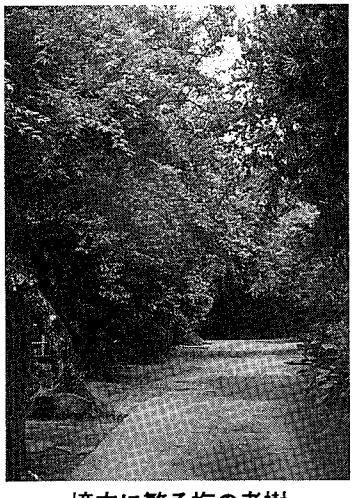
堂塔伽藍は永正十五年(一五一八)北條氏が造営、時の住職は中興の祖として二世と仰ぐ妙光院日形上人、北條氏康公の伯父であった。

小峯、八幡山を中心とした山地遺構は大部分が埋蔵状態となって居り一部の堀切等が僅かに残影を留めているが鉄砲(台風でポルトガル船が種子島に漂着したのは天文十二年(一五四三)八月二十五日。船に乗っていた三人のポルトガル人はいつも三尺位の鉄の棒を持っていた。領主、種子島時堯が何かと聞くと一人が銃を構えはなれた枝の鳥を撃ちおとしてみせ時堯らを仰天させた。領主は銃二丁を買い上げ鉄砲は伝来したのである)のない時代の城構えは虎口や矢倉、狭間、兵舎、米倉等を木柵内に設け周囲に堀切等を廻らす山城(砦)であった。

小田原城が現在地に移転



七面堂　平成4・5・19撮影



境内に繁る梅の老樹
平成4・5・19撮影

北條早雲銅像
平成4・5・19撮影

して権力者の威光を誇示する。本格的な城郭として完成したのは三代氏康（永禄十二年・一五六九年）の時代である。

二の丸の南東部にある中堀は昭和五十八年（一九八三）以来発掘調査が行われ現在では石垣復元工事が進み平成二年には住吉橋が復元した。城郭施設の復元を眼の当たりにするとき天守閣に秘められた武将の夢や小田原評定等後北條を偲ぶ歴史の残り香もただようのである。

平成元年小田原市荻窪に建設中の関東学院大学小田原キャンパス用地内を試掘、二年六月から十月にかけて埋蔵文化財の発掘調査が行われたが大きな曲輪が確認され虎口や矢倉等が立つ出城が築かれていた形跡があった。

この遺構は大外郭の外側にあり歴史的な記録がないため何れに属するものか判然としないが出土遺物の中から青銅製の銃弾などがみつかり後北條末期時代の関連遺構ではないかと推定されている。大外郭（郭は外城の城壁、土塁のこと）と云えば私は日中戦争から終戦に至る六年間、北支那（河南省・山西省・山東省）の戦野を転戦したが煉瓦造りの城壁や土塁（日本の煉瓦色と異なり万里の長城の色・黄土文化が築いた中国独自の風景）に囲まれた町や村を散見したものである。外から見ると家並みはすっぽりと土居に隠れてしまう。町や村全体を城壁、土塁や溝渠で囲繞して外敵の侵入を防いだのである。そんな光景を思い出すとき小田原城の大外郭もこんな格好ではなかったかと想像するのである。

大閤の小田原攻め（天正一八年・一五九〇年）で城北の守備を固めた武蔵岩槻城主大田氏房（五代氏直の実弟）軍は谷津村に駐留したがその要となる浄永寺附近に本陣を構えたのではなかろうか。

村は小名を岩槻台と呼び大田氏房の持口に由来するのだが、大学キャンパス地内の砦がもしも敵陣であったならば指呼の間に屯した大田軍はかなりのプレッシャーを受けたことだろう。

（続）

丹沢の植物 ⑭

城川四郎

箱根の山を歩くと、サルスベリのように樹肌が赤褐色でつるつるした樹があるのを知っている人は多いと思う。たぶん、それがヒメシャラという名であることを知っている人も少なくないはずである。公立学校共済組合の箱根の施設の名前にも、この「ひめしゃら」が使われている。

ところで箱根にはこのヒメシャラとそっくりの樹肌をした近縁のヒコサンヒメシャラも生えている。これをヒメシャラとは別物であると見分けている人は、よほど植物に詳しい人か目の鋭い人に違いない。ふつうの人は、二種類の存在に気がつかないものである。どちらも九州・四国・本州西部から南関東まで分布しているが、面白いことにヒメシャラは箱根を東限として丹沢までは分布を伸ばしていないのにヒコサンヒメシャラの方は丹沢まで分布を伸ばしている。

したがって、丹沢で見る赤褐色のつるつるした樹皮の樹はヒコサンヒメシャラだけなのである。ヒメシャラを箱根で足止めし、ヒコサンヒメシャラに箱根を越えさせた要因が何であったか？たいへん興味深い問題ではある。

両種の樹皮はよく似ているが、ヒコサンヒメシャラはよく見ると黒ずんだ横すじ模様が認められ、花はヒメシャラに比べて二倍くらい大きくて雌しべに毛がなく、冬芽は瓦状にならず二枚の鱗片に包まれているなどを注意すれば両種を見分けることができる。庭木や街路樹にヒメシャラを使っているのは見かけるが、ヒコサンヒメシャラが使われているのはまだ見たことがない。

※

日本の植物の分布形式にはいくつかの類型があって、その一つに九州・四国・紀州を分布の中心地とするものがあり、これをソハヤキ要素の植物と呼ぶ。ソハヤキ要素の植物群のなかには紀州からさらに東進して東海道から関東にまで達するものがあり、ヒメシャラもヒコサンヒメシャラもそれに該当する。蛭ヶ岳の西にある臼ヶ岳の近くではヒコサンヒメシャラの純林を見ることができる。分布の東限にある群落である。

ヒコサンヒメシヤラ
（つばき科）
Stuartia serrata Maxim.

著者原図

紅蓮洞・坂本易徳 ⑫

岡部忠夫

函東会のことについては前にもちょっと触れたが、この会は、足柄上・下両郡出身の在京学生が「相親睦シ智識ヲ交換シ彼我相益スルコトヲ目的」として、明治十五年（一八八二）に結成された。

会の名称は、学生の郷里が函嶺（箱根）の東に在るところから名付けられた。

この会の機関紙『函東会報告誌』が創刊されたのは、会が発足してから八年目の明治二十二年（一八八九）のことである。

この年の大きな出来事というと『大日本帝国憲法』の発布がある。

その二月十一日、東京を始め全国各地で憲法発布の祝賀が盛大に行われた。

この日の事を、ドイツ人医学者ベルツは、日記に次のように記している。

（二月九日）

東京全市は十一日の憲法発布をひかえてその準備のため、言語に絶した騒ぎを演じている。到るところ奉祝門（イルミネーション）、照明、行列の計画。だが、こっけいなことには、誰も憲法の内容をご存知ないことだ。

（岩波文庫『ベルツの日記』上）

小田原でもベルツのいうような似たり寄ったりの事をしている。

（二月十一日）

本日発布の憲法朗読式を松原神社々頭挙行し祝宴を鴎盟館に催し会員に官報号外の御紋章を附したる勅語告文を別ち、市中は緑門を三ヶ所に設け、花車、屋台を出して大いに賑わう。左に当日の覚書を掲ぐ。

（『明治小田原町誌』）

覚書は十六項目にわたるが、そのなかには、憲法朗読式に各学校生徒を参集させる、式終了後は餅・ミカンをまく、各町内には酒壱樽を贈る、煙火を打上げる、海岸で焚火をする、といった一連の祝賀行事が盛り込まれている。

ところでベルツは、憲法発布について、さらに次の記録を残している。

（二月十六日）

日本憲法が発表された。もともと、国民に委ねられる自由なるものは、ほんの僅かである。しかしながら、不思議なことにも、以前は「奴隷化された」ドイツの国民以上の自由を与えようとはしないといって悲憤慷慨したあの新聞がすべて満足の意を表しているのだ。

（前掲書）

明治維新を日本の近代化の出発点とするならば、憲法発布は、新しい国家の骨組みとその装いが具体的に整えられたことになる。ともかく一つの方向に決められた訳である。

憲法発布の二ヵ月後の四月一日、市制・町村制が実施された。

町村の多くは分合が行われ、旧町村の名称が大字として残った。小田原駅では、従来小田原幸町外四ヵ町と称していたところ、五ヵ町（新玉町（あらたまちょう）、萬年町（まんねんちょう）、緑町（みどりちょう）、幸町（さいわいちょう）、十字町（じゅうじまち））が合同して、単に小田原町（まち）と呼ばれることとなった。（『明治小田原町誌』）

この年には、鉄道の敷設が進んだ。

鉄道が産業の大動脈としての役割と共に軍事的面の任務を担ったのである。

七月一日、官鉄東海道線新橋・神戸間が全通。その五ヵ月前の二月一日、国府津・静岡間の部分開通があり、松田、山北両駅が開業した。国府津・山北が鉄道の街として発展する契機をなすものであった。

六月十六日、軍の要請により軍港を結ぶ大船・横須賀間が開通し東海道線と接続している。八月十一日には、現在のJR中央線である、新宿・八王子間の甲武鉄道が開通した。八王子からの織物の輸送に便利さが増した。

また、書籍の出版や雑誌の創刊が、年を追うごとに盛んになった。明治二十年代に入るとその傾向が顕著となった。『函東会報告誌』の刊行もこの時代の雰囲気を背負ってもいよう。

前にちょっと記したが、明治二十二年（一八八九）八月二十三日函東会大会が午後一時から小田原町の竹本楼で開かれた。まだ、残暑が続く季節であるが、夏休みで郷里に戻っていた学生が再び上京する前を選んでのことであろう。

ついでに記すと、竹本楼は、甲州出身の竹本屋幸右衛門が始めたものと思われる。竹本楼は、地図研究家の中村静夫氏によると〝いろう〟の二軒おいた東隣りに在ったと言われる。現在の栄町一～一二～一四あたりが該当する。

大会当日、在京学生ら三十余名の外、来賓として地域の有力者十数名が出席し

た。

この時の事を『函東会報告誌』は次のように記している。

席定マルヤ会員相澤鉄〔鉄〕之助起テ開会ノ主意ヲ演述シ併セテ雑誌発行ノ必要ヲ説ク其他坂本易徳石原重顕伊東直三等ノ演説アリ最後ニ中田寿一郎君（のち小田原町長）今井（徳左衛門）君ニ代リ答詞ヲ陳ヘ且本会ノ主意並ニ雑誌発行ノ挙ヲ賛頌セラレタリ酒肴ノ間快談懇話各々歓ヲ尽シ退散セシハ午後七時頃ナリキ

翌九月二十二日の第三日曜日、機関誌の発行が、京橋区新肴町開花亭で開かれた例会で協議がなされた。

出席者は、大久保忠一、宮部道清、円城寺泰交、畔柳政恒、相澤鉄之助、目良恒、相澤親之助が演説を行った。

月例会では、まず演説が行われるのが恒例となっていた。演説といっても、自分の意見、主張を述べるというよりは、研究発表といったのが適当である。

それは、会則の目的の「知識ヲ交換シ彼我相益ス」ることにあった。

相澤鉄之助は、その後『函東会報告誌』に、「甘露ノ説」「殖産法」「植物ノ旧地ヲ嫌フ事」「殖産法第二蚕業」などを載せているところを見ると、おそらく農業関係の話しをしたことであろう。

相澤は、農商務省所管の駒場にある東京農林学校に在学していた。なお、この学校は翌二十三年（一八九〇）六月、帝国大学に合併し、農科大学に改組されている。

目良恒は、家禄五十石を得ていた旧小田原藩士の子弟で、本郷の帝国大学工科大学に在学、大学の寄宿舎で生活していた。

その後『函東会報告誌』に「軍艦防禦法」「甲鉄鑑ノ沿革」「丸号ノ事」などを記しているところをみると、きっと軍艦に関する知識を披露したに違いない。

相澤親之助は、東京大学医学部予科から、東京大学予備門へ、さらに第一高等中学校（のちの一高）と学校が変わっている。これは、相澤が学校を転々としたのではなく、学校の組織替えによるもので、明治十年代までの政府の文教政策の目まぐるしい変転を示す一つの事例であった。

このとき相澤が何を演題として喋ったかはとらえ難い。

なお、親之助と鉄之助は、共に麹町区飯田町四丁目四番地に住んでいた。兄弟なのであろうか、それも従兄弟なのだろうか……。一応兄弟としておこう。

相澤兄弟は、旧藩士の子弟ではないようだ。相澤という苗字は、安政五年（一八五八）の「順席帳」にも、明治二年（一八六九）の「小田原藩士氏名禄」にも載っていない。すると、町方の分限者の子弟なのか、それとも足柄上、下両郡の村方の素封家の出ということになるが、今後の調査を待ちたい。

出席者のうち、大久保忠一は、函東会の会員であるが、在京学生ではなかった。旧小田原藩主大久保公の嗣子で、居所は芝区浜松町二丁目二十三番地の旧江戸藩邸であった。

大久保幼君―坂本易徳はこのような表現を用いたが、函東会々員として名を連ね、例会に顔を出すのも、郷党の子弟を励まさなければならない、という立場に置かれているという意識、いうなれば、一つの義務感からであったろう。

旧藩邸の一部は、在京学生に提供されている。ここに寄宿する学生は、卒業と共に入れ替えがあっても、常時十数名はいたと推定される。

この例会に出席の円城寺泰交、畔柳政恒は、この旧藩邸から通学した。

もっとも、旧藩子弟全員が利用できるほどはなかったとみえ、外に下宿しなければならない者もいた。

坂本易徳もその一人だった。

坂本は、慶応義塾正科の学友下山恪三と一緒に京橋区木挽町一丁目一番地志村方に下宿していた。しかも同室で。

下山は、足柄上郡酒田村金井島（開成町）の、村内きっての素封家の出身であった。

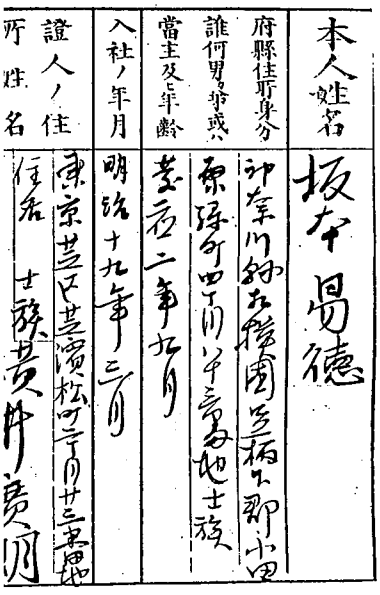
相沢兄弟、目良三名の研究発表が終わると、次に小田原大会の状況が報告され、機関誌発行について協議が行われた。

結果、創業委員として、熊本政共、相澤親之助、同鉄之助、坂本易徳、目良恒の五人が選ばれた。

創業委員の仕事は、発行に至る迄の段取りを決めることであった。

寄付金集めの目処がついた十月、創業委員はそのまま編集委員となった。そして、その発行兼編集人に選ばれたのは、坂本易徳であった。

（続）



坂本易徳の慶應義塾入社帳

古墳遍歴（八）

知られざる皇陵（2）

飯田悟郎

欠史八代

第二代綏靖天皇から第九代開化天皇までの八代の天皇は、『古事記』にも、『日本書紀』にも（以下『記・紀』と略します）系譜・諡号・宮居・在位期間・埋葬地などが記されているにとどまり、治績が殆ど伝わっていません。

他の史書も『記・紀』を下敷きにしているため大同小異で、それ故にこの八代は、「欠史八代」と呼ばれ、御歴代のなかではその実在が最も疑問視されています。そのためか御陵には詣でる人もまれで、神武天皇陵に隣接する綏靖天皇陵や、奈良市街のド真ん中にある開化天皇陵は、地の利を得ているためかそれでもチラホラ姿が見られますが、その他の御陵はいつ参拝しても人影を見ることは無く、それ故に却ってゆっくり雰囲気にひたれるかも知れません。

神武天皇から綏徳天皇までの四代の御陵は、畝傍山を時計廻りと逆方向に囲んで存在します。

綏靖天皇の桃花鳥田丘上陵（ツキダノオカノエミササギ）は、前述のように神武天皇陵に隣接する橿原市四条町田井ノ坪に所在し、一時は神武天皇陵と間違われたこともあるほどで、森厳の気に満ちています。

第三代安寧天皇の畝傍山西南御陰井上陵（ウネビヤマノヒツジサルノミホトノイノエノミササギ）は、畝傍山を挟んで綏靖天皇陵とは反対側の橿原市吉田町字西山にあります。

第四代綏徳天皇の畝傍山南織沙渓上陵（ウネビヤマノミナミノマサゴタニノエノミササギ）は、畝傍山の南麓、橿原神宮とは深田池を隔てる橿原市池尻町字丸山にあります。

第五代孝昭天皇の腋上博多山上陵（ワキガミノハカタノヤマノエノミササギ）は、少し西に寄った御所市大字三室字博多山にあります。参拝するのは簡単で、御所の駅から少し南に下り、奈良県立御所高校とは国道二四号線を挟んで反対側の丘の中腹にあり、すぐに分かると思います。

第六代孝安天皇の玉手丘上陵（タマテノオカノエノミササギ）は、和歌山線玉手駅の南、奈良県立御所工業高校の東側にある低い丘の上、御所市玉手字宮山にあります。近年まで陵上に八幡宮の小さな社があったそうですが、今では立派に整備されていて、眺めが宜しゅうございます。

第七代孝霊天皇の傍丘馬坂陵（カタオカノウマサカノミササギ）は、一つだけ遠く離れて北葛城郡王子町大字王子字小路口にあります。一寸分かりにくいのですが、王子駅の南、大和川を渡って、王子小学校の西、奈良県立王子工業高校の南にある丘の上ですからその辺りで尋ねてください。

綏靖天皇の御陵は小さい円墳であるそうですが（中に入れないのでわかりません）、安寧天皇から孝霊天皇までの御陵は自然の地形を巧みに利用していますが、第八代孝元天皇から前方後円墳の築造が始まります。

劔池島上陵（ツルギノイケノシマノエノミササギ）と呼ばれる御陵は橿原市石川の劔池を見下ろす丘の上にあり、長軸長五十米ほどの小さな古墳ですが、この形式の始まりと思えばゆるがせには見過ごせません。またこの池は農業用の溜池として応神天皇の十一年に作られたもので、御陵のためのものではないそうです。

第九代開化天皇の春日率川坂上陵（カスガノイザガワノサカノエノミササギ）は、奈良市街の中央、関西本線奈良駅から猿沢の池に至る道の中ほどに在ります。

名所旧跡の数多い奈良のなかにあっては目立たぬ存在であるためか、詣でる人も多くありませんが、全長百米程の古風な前方後円墳で、さまで大きくはないながらも周囲を巡る濠をもつ、立派な御陵といえます。

これらの御陵に詣でたい方のためには、奈良見物の途中に気楽に立ち寄れる開化天皇陵は別として、その他の御陵は交通の便は余りよくありません。

橿原神宮に参拝した後で歩いて行ける距離にある神武天皇陵・綏靖天皇陵はまだしも、その他の御陵には、運転できる方は自家用車またはレンタ・カーで、でなければそれほどの距離ではありませんから、タクシーの利用をお勧めします。

いずれにしても小半日の行程であり、時間にも余裕があれば途中に所在するいくつかの皇陵にも立ち寄れますし、飛鳥巡りも可能です。

各地各所のスタンプ収集の趣味をお持ちの方には、各御陵の御陵印を集める楽しみがあります。

但し、これは御陵ごとにおいてあるのではなく、橿原地区ならば神武天皇陵、明日香地区ならば欽明天皇陵にある宮内庁の管理事務所で無料で捺印に応じてくれますので、大いにご利用の上後々の思い出の一つとなさって下さい。

（続）

落穂集

◎佐川事件で渦中の人となった金丸信さん、去る十一月二十六日（金）眼の手術のため小田原市立病院に緊急入院、快方に向い十二月六日（月）退院。さすが天下の副将軍ならぬ、キングメーカーだった自民党の前副総裁。いろいろ話題を振りまき、「タダの人」にはならなかった。

病院の入口には、警杖を手にした若いお巡りさん、私服も警護したとか。同級生を見舞いにいった高校生、カバンの中まで調べられボヤいたとか。しかし、厳重な警戒体制を敷いたのも止む得まい。

救急入口には、ずらりとカメラを手にした報道陣、立ち放しでは疲れるとみえてか、椅子に座り要人の来訪を待ち受け。

曽野綾子さん「世界の冷たさ残酷さ」について、さる新聞の作家のコラムに擁護の弁。曽野さんの一辺倒の世論に対するバランス感覚が働いての事か？

それにしても、小田原市立病院眼科の存在は天下に知れわたった。ある日の如きは、僅かの間の見聞だが、東京から子供を診察してもらうため母親が、また、三重県から中年の患者が来院。富山にいる戦友F君、三年前患った脳梗塞の後遺症で言葉が不自由に拘らず電話をかけてきた。F君、最近富山で白内障の手術を受け視力が戻ったが、金丸さんの入院で小田原を思い出して電話をしたとか。

◎さる豆腐屋さん、ある料亭に豆腐を納入してきているが、五十丁を三十丁に減らしてくれとか。バブル経済のはじけで、高給料亭ほど不景気とのこと。

◎近田茂芳氏、四十五年間の文学活動で書きためた、短編・掌編小説の中から二十編を選んだ作品集『白い風景』を、去る十二月、河出書房新社から発行された。作品集の半数は小田原・箱根などを舞台としたものとなっている。なお、近田氏は、昭和二十一年（一九四六）以来、神静民報社の記者として活躍、現在同社の編集局長の職にあるが、日々締切時間に追われる劇務の中、文学への志を断っことなく、息の長い文芸活動を続けられているのに敬意を表したい。

会員消息

◎鈴木一正氏は、このほどユニークな文芸同人誌『時空』を創刊された。A5判四七ページの小冊子であるが、次のような目次で、内容は充実している。

〈座談会〉　文壇民俗学―外国体験と文学　桂秀実、富岡幸一郎、菊田均

〈短編〉　父の戻り道　前山光則

〈論文〉　戦無派の昭和史―近衛文麿―　菊田均

〈資料〉　最近における透谷研究文献目録(11)―昭和58年～平成3年―　鈴木一正

執筆者及び同人は、既に作品を出版されたり、雑誌に執筆されている新進気鋭の方々である。なお、この創刊号は定価五〇〇円（郵送料一七五円）であるが、この会では会費（同人）を募集しており、希望の方は月額三千円を添えて次に申し込まれるとよい。〒233 横浜市港南区日野六―十一―一九四〇四　鈴木方「時空の会」

◎岸達志師は、東泉院座禅会が四十周年を迎え、十一月二十九日（日）午後二時から小田原市民会館で記念講演会と祝賀パーティーを開いた。

講演会は、東大名名誉教授高崎直道氏「仏とはなにか」と題して、釈迦の出生から悟りを開いたことなどを約一時間にわたって講演。分り易い内容に約百五十名の聴衆は熱心に聞き入っていた。続いてのパーティーには約百二十名のひとが出席、歓談が続けられた。

◎田代勇輔氏（特別賛助会員㉕）かまぼこ店社長）、川崎長太郎「小屋跡碑」の建立に、その土地を無償提供された。

◎天野宏氏、去る十二月六日（日）小田原氏旭が丘高等学校で開かれた神奈川県和算研究会創立総会に於て副会長・会運営の委員長に推された。

なお天野氏はこのたび『神奈川県算額集』を編集出版された。

◎故伊東浩氏は内田哲夫氏が主宰した「古文書を読む会」に当初から参会、研鑽を重ねられたが、内田氏亡きあと、指導者に推され、地道な活動を続けられてきた。

◎小野意雄氏、小田原図書館第20期協議会委員に選任

会員訃報

伊東浩氏（小田原扇町一―一一―五）平成四年十一月七日逝去されました。享年八十三歳

御冥福をお祈りします。

小田原史談会諸行事等

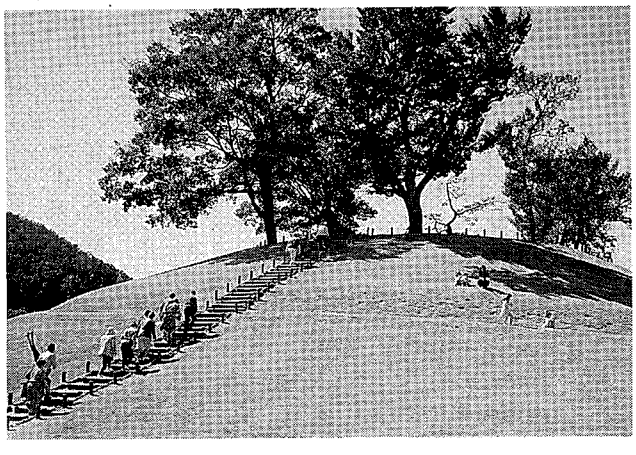
甲斐路歴史探訪　平成四年九月二七日(日)

郷富子、河合浩太郎夫妻、額田ツネ子・シゲ子、木曽シゲ子、七時小田原駅前出発。十九時二十五分帰着

〔コース〕山梨県立美術館―山梨県立考古博物館・丸山古墳（円墳）―甲斐国一の宮・浅間神社―勝沼町営ぶどうの丘（昼食）―大善寺―景徳院

〔費用〕七千円

〔参加者〕高田喜久三、岡部忠夫、和田登、飯田悟郎、山口一夫、小田中正二、曽我保夫、吉池清、和田ヤス子、久保喜久江、堀越真一、岩本武、奥津定・チヨ子、内田公子、西



丸山古墳　撮影　田口鏡子

田中悦子、菊池八千代他二名、小西マツ、伊東高子、湯川玲子、柏木ミツ、関田トミ子、藤田和子、安藤繁美、杉山千代子、南陽子、矢野公子他一名、田口鏡子、布施洋子、内田三枝子、小山俊夫、府川宏江、大河原安、田中ヒサ江、吉崎ヨシ江、石井艶子、田島迪江、奥津富子　以上四十七名（敬称略　順不同）

俳句　和田　登仙

山梨県立美術館にて

。秋光や甲府盆地にミレーの美

大善寺にて

。秋澄みて急階段の薬師堂

景徳院にて

。勝頼公自害の石や肌寒く

。そぞろ寒北条夫人の墓の翳

奥三河歴史探訪　平成四年十一月一日(日)

七時小田原駅前出発。二日(月)十七時三十分帰着

〔コース〕　龍潭寺（りゅうたんじ）—龍ケ岩洞（りゅうがいどう）—奥山・きじ亭（昼食）—満光寺（徒歩）—パークウエイ—鳳来寺……鳳来寺山—湯谷温泉・とらやホテル（宿泊）—鳳来町立長篠城址保存館—豊橋・吉田城址—豊川・喜楽（昼食）—豊川稲荷

〔費用〕二万九千円

〔参加者〕　高田喜久三、岡部忠夫、和田登、山口一夫、曽我保夫、富田千春、吉池清、和田ヤス子、杉山竹二・房江、湯山浩二、中島広子、田中ヒサエ、湯川玲子、遠井清子、遠藤茂子、瀧野国雄・幸江、額田好男・常子、剣持芳枝、小栗良英、角田道、武井弓子、山口広子、河合浩太郎、稲子藤江、

以上二十七名（敬称略　順不同）

俳句　和田　登仙

龍潭寺にて

。古刹かな満天星紅葉（どうだんもみじ）緋と燃えて

満光寺にて

。竹の春家康鶏に救われし

鳳来寺山にて

。急峻の階（きざはし）朽葉踏みつゆく

湯谷温泉にて

。岩盤の瀬音より翔つ秋の風

長篠城趾にて

。落葉して犬迷い出る長篠城

『小田原史談』総集編発行検討委員会発足　上記標題の件について、去る十月十八日(日)の理事会で図られた結果、検討委員会を発足することに決定。

小栗　柳川　両氏理事に　このたび小栗良英（中町）・柳川辰夫（曽我原）両氏が理事に推挙された。

特別賛助会員

智恵袋　相田酒造店
小田原銀座　アオキ画廊
熱海　アオキクリニック
足柄香粧株式会社
飛魚屋
紳士服の　アメリカヤ
画材　ガクブチ　Vのうえ
伊勢治書店
かまぼこ
株式会社　江島
税理士・公認会計士　小澤重治事務所
株式会社　小田原魚市場
小田原ガス
小田原市農業協同組合
小田原報徳自動車
株式会社　オートセンター・スギヤマ
(共)小田原中央青果株式会社
オリオン座
かまぼこ　籠清
金掌苑
鐘紡株式会社小田原工場
カネボウ化粧品鴨宮工場
神尾食品工業株式会社
木地挽　日下部産業株式会社
かみやま小児科クリニック
興電社
小伊勢屋
(有)小松石材店
さがみ信用金庫
宝飾専門店　Shimano

正栄堂
中華料理　昇玉
杉山水道工業株式会社
鈴廣かまぼこ
石寿堂スポーツ
大営不動産
割烹　おるは
そばそ　二宮
茶半家具株式会社
ちんぎう本店
土谷建設株式会社
角田ガクブチ店
東京電力(株)小田原営業所
株式会社　東華軒
トーホー建物株式会社
八小堂書店
八ナマサ
平井書店
富士写真フイルム株式会社小田原工場
株式会社　報徳
栄町　松坂屋
学生専科　マルク
食器の店　マルサンストアー
みつゆき設計
株式会社　美濃屋吉兵衛商店
みみづく幼稚園
ヤオマサ株式会社
山口菓子舗
湯浅電池株式会社小田原製作所
防災器具　優光社

小田原史談（年四回発行）
年会費　普通会員三千円
振替　横浜(2)六四三三六　小田原史談会会員部